クラシック巡礼 01

ルードヴィッヒの夢

サイト掲載： www.i-s-m-kk.co.jp/

２０１８年 ２月２４日

別当　勉

〈betobetoven@mail2.accsnet.ne.jp〉

クラシック巡礼 「テンペスト」

2009.12.26，2014.01.29改，2018.01.14改　別当 勉

五味康祐の「音楽巡礼」の文庫本が懐かしく、あの感激をもう一度と、とにかくクラシックの名曲を言葉でも鑑賞したいと長年探しに探してきた。本屋に行ったときは、他のありきたりの音楽評論家をとばして必ず本棚をサーチしている自分である。でも、再発行されずに埋没したままのようだ。いつも無念に諦める。人類の貴重な資産と言ってもよい名曲の深遠な味わいを鮮やかに語ってくれたのは、僕の知るかぎり彼だけである。このため、僕が稚拙なレベルで真似てみたい。

（実は、2010年8月に那覇市の本屋で、偶然にも再発行「オーディオ巡礼」に遭遇した。「音楽巡礼」とはカップルの随筆であるが、思わず ”Ｉ missed you”（会いたかった)感激で買い込んで、満悦し、読みだすとクラシック評論もたっぷりしており、もう離せない。）

クラシックと僕の運命的な出会いの最初は、ベートーヴェンのピアノソナタ１７番であった。運命とは、その耽溺の泥沼にはまり込んでしまった、という意味である。しかも、自分の人生を左右するほどだったのだから、正に運命と言えるであろう。

昭和４２年頃で、食べるのにも大変な学生時代に、惜しみなく２千円をはたいて、孤高のピアニスト、ウィルヘルム・バックハウスのＬＰ「三大ピアノソナタ、熱情・月光・悲愴」を聴いて味をしめた。特に、ピアノソナタの典型である「第８番悲愴」で、その易しい新鮮な調べにいつの間にか聴き込んでしまった自分を思い出す。次に出た「三大ピアノソナタ：その２」にも期待して生活が辛くなる思いを棚上げして、また買い込んだのだから、何というべきであろうか。下宿に帰って何故かワクワクしてぴかぴかのレコードに針を落として聞き始めたら、うとうと眠ってしまった。順番としては、「第２１番ワルトシュタイン」から「第２６番告別」、「第１７番テンペスト」へと移るが、最初の曲は、当時の僕には悲愴と月光以外、難解であったベートーヴェンのピアノ曲調が子守唄みたいに聞こえてしまったのである。そして、針が盤の最後の内周でシュー・プツンの単調な機械摩擦音の不快さに眠気を覚まして、針とレコード盤の溝の擦り切れを心配するように重い腰を引きずって盤を返し、また、うとうと。

（今はＣＤだから終わると無音になり、随分と神経も楽になった。）

情けないと思いつつも、自分に甘過ぎる体たらくなのだが、安っぽい電気コタツのぬくみになんとも言えないほどの快感を貪っていたのだ。そして、しばらくしてウトウトの合間に流れるようなリズムと、悲哀感を込めたアレグレットに目を覚ました。早回しのオルゴールよりも滑らかで優しい打鍵音の連続である。僕の気分は乗りまくり、いや、乗らされている。

いつのまにか正座して、耳は１０倍ぐらい大きくなったようだ。

この時代の僕の神経は、食よりも感動に飢えていた。いま思えば、若さの感性はスポンジのように、美を吸い取るターボ・パワーがあったのだ。とにかく、急いでアルバム付属の解説を読む。そしたら、それがテンペスト第３楽章だった。もう、ワクワクでなくソワソワ状態で、第１楽章から再度、針を落として聞き込む。何度も何度も。眠気は蒸発してしまった。

第１楽章は、劇的であるが、こわれそうなかすかな哀愁もこもって大胆さと綾なし、これが大きく展開されて気持が昂ぶる。しばらくして、忘れられやすいアダージョの第２楽章のあと、いきなり、あのタララララ、タララララ、のアレグレットだから、もう耳の集音が止まらない。何というべきか。マイナー（短調）での早いテンポは例が少ない。しかも、悲哀をこめた健康的なメロディは、滑らかさを伴って僕の神経はいつも溺れてしまう。まるで、朗らかで躍動的な印象にもかかわらず、何か悲劇を秘めた、か細い女優：上野樹理のように。結果、洗脳でなく洗情されるのだ。このような感激というか衝撃は、いつしか、自信として蓄積されていったことは事実である。だから、芸術の極みを前にしても怯まずに堪能しようとする姿勢が培われたのだと思う。学習という名の成長本能の一部である、いや、全部かもしれない。

テンペストという曲名は、ベートーヴェンが「シェークスピアのテンペスト（嵐）を読め」とコメントしたから、後世、その名が冠されたということのようだ。ちなみに僕は読んでない、いや、読むよりも曲が感想を語ってくれるから不要と身勝手に判じたのである。

しばらくして、僕は喫茶店のアルバイトをしているときに、ふとしたら、店に置いてあるアプライト・ピアノを弾かしてくれと、男性客がせがんできた。まばら入りであったのでマネージャは即座にＯＫした。それで、誰しもその男が弾くものと思っていたら、髪の長いスラリとした女子大生が呼ばれてピアノの前に座った。彼女は乗り気でなかったのだが、その男が無理気味に何かリクエストした。それがテンペストの第３楽章であった。難技の曲であるのに、いきなり、タララララ、タララララ、で始まったから、さあ大変。店の客も耳をこらした。僕の胸ははじけんばかり。少し声を上げて、「すげえー、テンペストだー！」と叫んでしまったら、その女子大生の指が少し躓いてしまったけれども、最後まで弾きとおした。リクエストした男性は、申し訳なさそうな僕をみてガッツポーズ。彼女はそそくさと恥ずかしそうに席に帰った。まさか、テンペストを知っている人がいるなんて、と思ったのかもしれない。彼女は、後で思い出すとロンドンで活躍中の世界トップレベルのピアニスト内田光子に似ていた。

このようなテンポの速いオルゴールみたいな曲想の第３楽章は、あまり類例をみなかった。しかし、最近になって愕然とした。あのシューベルトが遺していた最後の三つのピアノソナタのうち、一番目の第１９番である。その第４楽章のアレグロは、正にテンペスト第３楽章

をイメージしていたとしか考えられないほど、曲調が似ている。しかも、哀切と郷愁を匂わせた濃厚なセンチメンタルに酔い痴れてしまう。そしたら、このような感じの曲は「タランテラ調」というらしく、いろいろな作曲家がいくつか残している。

さすがに、シューベルトが敬愛したベートーヴェンへの想いが結晶したのであろうか。ベートーヴェンの葬儀では霊柩車の綱を引いていたことが、ウィーン子の瞼に焼き付いたそうだ。ベートーヴェンの３２曲のピアノソナタに敢然と挑戦した結果、後人未踏の２１曲も創り上げたのだから、その意気たるや思い知るべし。ただ、ベートーヴェンの死の１年後に、３１歳で夭折したことは神々のいたずらとしても酷い話であるが、本人の遺言どおりベートーヴェンの墓の隣に埋葬されたことは、個人の熱情というものは、幻想だけの神の存在以上なのかもしれない。

さて、僕の買ったアルバムのピアニストは、ウィルヘルム・バックハウス（1884 - 1969年）という稀代の巨匠。いまや、伝説のピアニストであり、しかも後年はベートーヴェンとブラームスに執着した。協奏曲では、世界一のウイーン・フィルハーモニー管弦楽団は、当時、彼としか協演しないという特別待遇で、８０歳を超えて死ぬまでそれがとおった。周りも圧倒的な実力を認めて世界中が、空前絶後のマエストロ（巨匠）と絶賛していた。ということは、後で解ったのであるが、当時は、頑固そうな老人がアルバム前面をカバーしており、繊細なロマンを醸し出すような雰囲気はなかった。しかしながら、青二才の僕には何となく、ベートーヴェンの重厚さに重なるような印象で大枚をはたいてしまったのだ。昭和４２年当時のＬＰ１枚：２千円は、アルバイト時間給：１００円、ラーメン：６０円の時代だったから、今の物価に照らした貨幣価値にするとだいたい２万円弱である。まさに飢餓とのバーゲニングだった。

ちなみに、評論家筋で有名だったスビャトスラフ・リヒテル盤は社会人になってから聴いたが、それなりにリヒテルのダイナミズムは良かっただけで、余り印象に残らなかった。というか、最初の刻印がバックハウスだからしょうもなく、後釜のレコードは可哀そうだ。これは、動物学的にいうと「刷り込み」という。産みの親より育ての親と言われることと同じ。だから、音楽を鑑賞することにおいては、推薦盤から取り付くのが間違い無く、一番なのである。１００枚以上の自前ライブラリーが出来て初めて、埋もれた楽曲とか演奏など、他の意見に左右されずに自ら評価できるようになるだろう。

僕が感謝すべきことは、若さという吸収率最大の時期に出会えたことであるし、不細工な田舎者でも美に対する純真なあこがれがあったことだ。また、「乙女の祈り」とか「トロイメライ」など、ピアノ音に対する小さい時の遠い郷愁感が頭の奥で残っていたことに、後で気づいた。

＜註＞

『テンペスト』は、シェークスピア作の戯曲。「テンペスト」とは「嵐」を意味する。初演は1612年ごろ。シェークスピア最後の作品といわれる。

登場人物：

プロスペロー	主人公、遠島、復讐の鬼
ミランダ	プロスペローの娘 ⇔ ファーディナンド
アリエル	妖精
ナポリ王アロンゾー	プロスペローを罠にはめて失脚させた
ミラノ大公アントーニオ	プロスペローの弟、兄の失脚に加担し、大公位を横取り
ファーディナンド	ナポリ王アロンゾーの息子、ミランダと恋愛

あらすじ： ナポリ王アロンゾー、ミラノ大公アントーニオらを乗せた船が大嵐に遭い難破、一行は絶海の孤島に漂着する。その島には12年前に弟アントーニオによって大公の地位を追われ追放されたプロスペローと娘ミランダが魔法と学問を研究して暮らしていた。船を襲った嵐は、12年前の復讐をするために、プロスペローが手下の妖精アリエルに命じて用いた魔法（歌）の力によるものだった。王の一行と離れ離れになったナポリ王子ファーディナンドは、プロスペローの思惑どおりミランダに出会い、2人は一目で恋に落ちる。プロスペローに課された試練を勝ち抜いたファーディナンドはミランダとの結婚を許される。一方、更なる出世を目論むアントーニオは王の弟を唆して王殺害を計り、また、島に住む怪獣キャリバンは漂着した賄い方と道化を味方につけプロスペローを殺そうとする。しかし、いずれの計画もアリエルの力によって未遂に終わる。魔法によって錯乱状態となるアロンゾー一行。だが、プロスペローは更なる復讐を思いとどまり、過去の罪を悔い改めさせ、赦すことを決意する。和解する一同。王らをナポリに送り、そこで結婚式を執り行うことになる。最後に、魔法の力を捨て、アリエルを自由の身にしたプロスペローは観客に語りかける。自分を島にとどめるのもナポリに帰すのも観客の気持ち次第。どうか拍手によっていましめを解き、自由にしてくれ、と。

〈http://ja.wikipedia.org/wiki/〉

［追記］　本クラシック巡礼は、１０年前の想いを綴ったものの最初の随筆である。そのために、時代の変遷をおきざりにしてしまった。いまは、インターネットの“Amazon”という通信販売サイトにおいて、五味康祐「音楽巡礼」という名著が古本としてアップされていることに気付いた。その本はもう無いという固定観念に染まってきた無念さを振り払い、さっそく手に入れたのが今日この頃である。この本こそ、まさに、我々が雑誌やマスコミにまやかされてきたことによって、埋もれてしまった名曲を鮮やかに掘り出してくれる「鍵」であることは間違いない。

ルードヴィッヒの夢

2016.03.21，2018.01.14改　別当　勉

問題は彼だ。クラシックを語るだけでも避けては通れない巨大な凡人である。好き嫌いという我々の嗜好をはるかに超越している。いったいどんな人間であったのだろうか。明快に解き明かした人はあまりいない。あのフランスの文豪ロマン・ロラン（1866～1944）は、見事にルードヴィッヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770-1827）の楽曲構造に深く切り込んだが、情緒的な分析は多くなかった。ロマン・ロランの時代は、レコードとかＣＤなどの再生音楽の大津波が来る直前だった。このため、彼は直にスコアを読みながらピアノの演奏をすることで音楽を堪能したのであるから、感想はそういった事態を勘案しないといけない。超一流の演奏家の録音に痺れているわれわれ素人は、その差異を思い測るべきである。

いまのわれわれ聴衆が欲しいのは、贅沢にも、堂目すべき美しい調べとめくるめく情感の展開、それから人間模様である、などとロマン・ロランに対して欲張るべきではない。

ルードヴィッヒの人間模様についての種明かしは、世俗的なアプローチから始めることにしよう。

たぶんに想念を音色にして人々の感激を沸かした結果、満場に捲き上がる喝采を浴びて例えようもない快感に浸り、それをルードヴィッヒは何度も欲しくてしょうがなかったと、一つ言えるかもしれない。現在では大観衆を集めたライブ演奏が典型であるが、それを自分で企画し製作・演出した、「運命」や「田園」にとどまらず、あの劇的な「第九初演（５４歳）」を筆頭に、彼の確固たる信念が覗えよう。バッハ（1685-1750）やアマデウス（ウォルフガング・アマデウス・モーツァルト：1756-1791）とは、独立不羈の『芸術家』志望という点で大いに異なる。

あの世界一の管弦楽団、ウイーン・フィルハーモニーは１８４１年に創設されたが、ハイドンやアマデウスを経て、ルードヴィッヒが、規模を膨らませたオーケストラのための華麗な交響曲や管弦楽曲を積み上げていたからでもあろう。彼の逝去後１４年も経ってからである。彼がコンサートを企画する度に、かなりの労苦が伴ったにちがいない。創設者オットー・ニコライの主旨によれば「過去の遺産、とくにベートーヴェンの理想的な演奏を実現したい」ということであった。

特に豪華な曲になればなるほどオーケストラの実力が問われる。例えば、次の曲である。

ピアノ協奏曲第５番「皇帝」作品７３（３８歳）

https://www.youtube.com/watch?v=o5fNRKUOsco

指揮するルードヴィッヒ。鳴門市ドイツ館の正面。1997年にドイツ人彫刻家ペーター・クッセル氏により制作。

http://www.city.naruto.tokushima.jp/contents/daiku/treasure.html

そう、ルードヴィッヒは大観衆に包まれたライブ演奏が大きな夢の一つでもあった。そんな「夢」たちを綿飴(わたあめ)のように胸一杯に巻き付けた２２歳が、ボンからウィーンに上(のぼ)った。晩年の彼に面会に行った１１歳の麒麟児リストさえ驚愕させたほど、凄まじいピアノ演奏技術を携(たずさ)えて。あたかも将軍家剣法指南役の抜擢(ばってき)に挑戦しようとした武蔵のごとく江戸＝ウィーンにのぼったのである。上京して即座に、ウィーンのトップクラスのヴィルトゥオーゾ（達人演奏家）に数え上げられてしまったほどだから。ただし、王侯・貴族向けのピアノ教師や作曲教授だけでは満足できなかった。

ベートーヴェン30歳の肖像

ロマン・ロラン著「ベートーヴェンの生涯」から

この像では、ベートーヴェンは年齢よりも若く見え、痩せて、首を真っ直ぐにして、高い襟飾り中で硬ばり、油断の隙を見せぬ緊張した眼つきをしている。彼は自分の価値を自覚している。彼は自己の力を信じている。1796年に手帳の中にこう書いた――「勇気をだそう。肉体はどんなに弱くともこの精神で克ってみせよう。いよいよ、25歳だ。一個の男の力の全部が示されるべき年齢に達したのだ。」

【春】

最初に掲げるべきドリーム満載の曲は、３１歳における作品：

ヴァイオリンソナタ第５番「春」

第１楽章　アレグロ・コン・ブリオ（速く、輝くように）

https://www.youtube.com/watch?v=kwvfCR2DXxI

である。音楽にかぎらず作品は美しく綺麗でなければならない。これが創作の原点であろう。この曲のメロディだけでもその溌剌とした春色に思わず呑まれてしまう。楽器の純粋な響きが芽吹いたばかりの若葉を連想させ、軽快なリズムに小鳥達も待ち遠しかった「春が来た」とはしゃいでしまう。その情景がヴァイオリンとピアノの掛合いにより鮮やかに華やぐ。

このピアノとの絡みは、この曲がヴァイオリン・コンテストの課題曲の定番になってきたポイントになっているそうだ。さすがに宮廷のサロンに集まった口煩い貴族たちでも競って演奏した情景が瞼に浮かぶ。感激は、取り巻くアマチュア演奏家たちももう一度と叫ぶのだが、ルードヴィッヒだけは、次はもっといいものと己れにねだっている。

なお、「願望の動機*」が仕込まれているようだから、それを我々は知らず知らずのうちに、いつのまにか「春よ来い」という望みに沸いてしまうのかもしれない。

＊ 4小節目(ド～シ)と6小節目(ファ～ミ)に下降する音型が現れるが、この2つの音の後の方が下がる音型は、バロック時代から、ひとつの書法として定着して来たもので「願望の動機」ともいわれている。ベートーヴェンはこの動機を大変好み、多くの作品に使った。〈http://www.geocities.jp/mani359/2mei0603beet.html〉

しかも、彼は情熱エネルギーの燃焼という創作活動だけではなく、自然の香りと息吹にも印象的情緒が飛び火して作品に盛りつけた。３７歳のときの

交響曲第6番ヘ長調 「田園」 Op.68

https://www.youtube.com/watch?v=reL8DbbpHWQ

は正にその代表的傑作でもある。その第１楽章第１主題は、とあるキリスト教会のテーマ曲にもなっているそうで、自然に対する限りない敬仰を表していることに神々のメッセージが醸し出されているという。さらには、第５楽章こそ穏やかに優美な空と野原が表出されていて、彼の心が澄みわたっていることが覗われ、その和やかで踊るような風景はディズニーの「ファンタジア」を見たら誰しも忘れられなくなる。

「田園」は、第５番「運命」とほぼ同時期に作曲され、１８０８年同時に彼自身のプロデュースによるコンサートで初演された。初版冒頭には、「パストラル（田園）交響曲　または、田舎の生活の記憶」と書かれており、各楽章には次のような標題が付けられた。

第１楽章：「田舎に到着したときの愉快な感覚の目覚め」
第２楽章：「小川のほとりの情景」
第３楽章：「田舎の人々の愉快な集い」
第４楽章：「通り雨（夕立）、嵐」
第５楽章：「羊飼いの歌、嵐の後の喜ばしく有り難い気分。」

このようにして華々しく『**標題音楽**』が初登場したのである。

さっそく、ベルリオーズがこの標題音楽を真似(まね)て

「幻想交響曲」（1860年）

を創り、一大センセーションを巻き起こしたことは余りにも有名である。

この『田園』は、ルードヴィッヒが好んで散歩したハイリゲンシュタット村の牧歌的風景が想定されている。季節は春から夏であるが、ヨーロッパは空気が乾燥して日光が穏やかにふりそそぐ。心地(ここち)よさは筆舌(ひつぜつ)に尽くし難い。各地のどこでも６月が最高で結婚式のシーズンともなるから、“June Bride”（６月の花嫁)が一番と言われるようになったのである。

とにかく、野原は爽(さわ)やかこの上なし。街ではどこでも広い歩道にはみ出たカフェ・テラスが多いのも当然であり、車もオープンカーがあちこちで走っている。夏の高温多湿で少し歩いただけで汗だくになり、いつのまにかスターバックスを探している。家ではエアコンが欠かせない。そんな日本では考えられない。欧米では民家に限ればどこにも室内エアコンは付いてないのである。

そんな天国的風景をルードヴィッヒは胸に抱(いだ)いてきた。自然の風景の息吹(いぶき)を総天然色の管弦楽で描いて聴衆の耳に吹き込んだのである。サウンドだけで大自然のパノラマを見せたのだ。映像や画像なしでは感じなくなった日本のヤングには、ルードヴィッヒのセンスは想像できまい。

【自律】

彼に芸術の創作に駆り立てたのは、ドイツ文学界で

“シュトゥルム・ウント・ドラング”「嵐と衝動」

★シュトゥルム・ウント・ドラング（独: Sturm und Drang ;「嵐と衝動」） http://kotobank.jp/word/
18世紀後半、若き日のゲーテ、シラーなどを中心にドイツで興った文学革新運動。理性偏重の啓蒙主義に反対し、感情の自由と人間性の解放とを強調した。クリンガーの同名の戯曲に由来する名称。
（なお、シラーの詩「自由賛歌」を基にした第九第4楽章の「歓喜の歌」は有名過ぎる。）

という新たな潮流にひどく感銘し共鳴したからだという。その旗印のもとに、全ての分野で改革が叫ばれてきていた。日本では明治時代に「疾風怒涛」と訳され、勢いだけ強調されすぎて余り本旨が浸透しなかった。意訳に凝(こ)る日本人インテリの欠陥である。本来は、古さの真似事(まねごと)だらけの惰性（演奏）からの脱却であるから、猪突猛進のごとく古い障壁を打破し、こだわりなく衝動的に新たなものを創るという意味であろう。それに必要となるものが自助努力を惜しまない「自我の確立」であり、つまり“ロマン主義＝個人の解放”ということである。これに鋭敏に反応したのかもしれない。すなわち、ルードヴィッヒもこの運動と、その核である『自我』を強く意識した。ロマンティシズムという言葉の甘さとは裏腹に、その芸術表現には、過去からの旺盛な独立心が必須なのである。

正に、新たな創作の苦しみに自ら突進していくことが讃(たた)えられ始めた時代である。ただし、耐え難いほどの孤独と貧乏に阿修羅のごとく戦うことになるのだが、それが真に身に染みるのは３０歳を超えてからである。豊満と窮乏、平穏と激情、そして希望と絶望という心中の合戦ともいえる。

要するに、若くて何の障碍(しょうがい)もない彼の夢は他人（過去）の音楽では叶(かな)えられないと悟ったのである。そんな彼が、あの「月光」を連想させるような幻想的な曲を２４歳で書き上げていた。かってない、遥(はる)かな未来のドビュッシーを先取りするような印象（香り）を漂わせている。

ピアノソナタ第３番ハ長調　第２楽章アダージョ（1795 年）

https://www.youtube.com/watch?v=-qXt2skD22Y

彼は若くして持っていたのだ、ファンタジックなセンスを。革新的な芸術とは、激情だけでなく人間の幅広く豊かな情感の表出であるとも意識していたにちがいない。

また、楽曲形式においては、交響曲の第３楽章メヌエットに拘(こだわ)らずに、乱れたステップみたいな「スケルツォ：冗談」を導入して曲の自由度を拡げ、すなわち作曲家のクセや気分、あるいは民族舞踊までつづれることになった。これは、まさに革新である。もともと、スケルツォはハイドンが一部の弦楽四重奏曲で使い始めたといわれている。演奏時間が長いシンフォニーは本来的に次のような構成になっていた。

第１楽章：　ソナタ形式の醍醐味：シンフォニーの顔

第２楽章：　安らかなアダージョ

第３楽章：　華やぐメヌエット　→　**心おどるスケルツォ**（好きなように）

第４楽章：　フィナーレ：アレグロ

３０分以上も聴衆を張り詰めさせず、リラックスさせるための第３楽章でもあった。その目的はメヌエットだけでなく他のダンス音楽も可能とし、さらに、チャイコフスキーの「悲愴」第二楽章における５拍子など乱拍子の曲にも拡大しても効果は上がり、かつ目新しい曲調に聴衆が堂目するということにもなる。

ルードヴィッヒはそれを交響曲で常態化させたのである。しかも、後進のブラームス、ドヴォルザーク、チャイコフスキー、ブルックナー、マーラー、ショスタコービッチというシンフォニーの大家（たいか）たちが踏襲したのだから。

それを考え始めた若き日の作品を聴けば、ふざけたスケルツォという楽想が鮮明になり、かつ、ピエロやドン・キホーテなどのお笑いキャラクターまで人それぞれに発想できてしまう。

チェロ・ソナタ第３番 第２楽章スケルツォ（1808 年）

https://www.youtube.com/watch?v=AwBownNu2qA

創作の自由度と聴衆の注目度を拡げるために過去からの固定観念（メヌエット・オンリー）を破ったのである。

【矜持（きょうじ）】

このように、ルードヴィッヒ青年の人生観が醸成されたのであろうが、まず先人たちが少なからず行ってきた民謡とか教会音楽からの「旋律の採曲」を嫌った所以（ゆえん）であるとも考えられる。今では、シューベルトと並んでメロディ・メーカーとも言われるほど有名。ドヴォルザークとかバルトークなど後輩達が民謡採曲を常用したことには、彼が生きていたら唾棄（だき）していたはずだ。それでもパガニーニの「ラ・カンパネラ」のリスト編曲版や、ムソルグスキーの「展覧会の絵」のラヴェル編の管弦楽バージョンなどを聴いておれば、少しは和（やわ）らいだに違いない。特に、リストが後（のち）にルードヴィッヒの全交響曲をピアノ用にアレンジしたものは、知ったら顔をしかめてブツクサ言いながらも容認したはずと想像に難（かた）くない。リストも、まさかこの編曲がその後の指揮者たちに秘かに愛用されてシンフォニー演奏に役立ち、ルードヴィッヒの作品の演奏頻度（ひんど）が永遠の世界一になったことにおいて、少なからず貢献したことは予想だにしていなかったであろう。ピアノ版の演奏が殆（ほとん）ど無いことに落胆しても。

そして、すべて自分で作るという信条を変えたかもしれないという仮説は安易に捨て難い。つまり、編曲だけでも原曲にオーケストレーションや華麗な装飾あるいは音感のイメージ変換などの付加価値がついて芸術性豊かな作品になったのだから。

蛇足(だそく)になるが、晩年５２歳のときの

ディアベルリのワルツの主題による３３の変奏曲　Op.120

https://www.youtube.com/watch?v=xN0yDqvipr4

だけは、世話になってきた楽譜出版商ディアベルリからワルツの主題が提示されて広く募集されたことで編曲の作品を仕上げた。最初は無視したが、何故か嫌々ながらもそれに応えて、バッハの「ゴールドベルク変奏曲(BWV988)」に並ぶほどの傑作を産み出したことは、他人の旋律を使用した例外として掲げておく。契機は、どうも『不滅の恋人』の一人とみなされてきた１０歳年下の“アントーニア・ブレンターノ夫人”への贈り物にしたくなったから、とも伝えられている。

ルードヴィッヒは、楽譜出版社でつける作品番号（Opus）を自分で付けた最初の音楽家と言われている。Op.138まで１７０曲を出版したが、それ以外の作品が２００曲ほどあり、没後、WoO*番号すなわち作品番号がついていないナンバーで整理された。これらは、小品、習作あるいは未完となっているものであるが、その中には多くはないが他人の旋律を主題にした編曲の類いもある。これをもってしても、編曲については己れの作品とは認めようしなかった矜持(きょうじ)（誇りと自信）が覗(うかが)える。

＊ WoOとは、ドイツ語のWerk ohne Opuszahl（作品番号なしの作品）の略語。

ちなみに、アマデウスの全作品：６２６曲のケッヘル番号は、没後７０年経った１８６２年に、ルートヴィヒ・フォン・ケッヘルという研究家がこの緻密かつ克明な調査による作業を最初に行って付与・出版したものである。

己れの信念を貫くためには、労力という努力よりも、他人にはない突出した才能が不可欠である。そこで、誰も余り追求していない問題が一つある。彼がどこで誰に、調律、対位法、和声法や作曲技法を学んだのであろうか。売れないテノール歌手であった暴力的な父親に、６歳から７歳のルードヴィッヒは強制的に演奏技法を教えられ、宮廷での演奏会にも出されて稼がされたが、その父が早世したため長くは続かなかった。ボンでは、１１歳のときオルガニストのクリスティアン・ゴットロープ・ネーフェにも教わったようである。上京したばかりの２２歳のときには、ハイドン（1732-1809）に許されてわずかな期間であったが、作曲技法を学んだという。音楽の基礎理論は、ハイドンの紹介で名教師アルブレヒツベルガーに教えを受けた。いずれも、一時的で断片的で一貫していない。おそらく、二人の弟の暮らしまで面倒みていたから、演奏活動で稼ぐことが第一だったので、しかたない事情にあったものと考えられる。

授業料も払わなくてよい「特別待遇」であったことは疑いないが、それ事態、ルードヴィッヒは各師匠たちに楽界の麒麟児のごとく評価されていたことの証でもある。

天稟の才能は一貫した教育を経ずに膨大な知識を吸収できるのかもしれない。そのような不遇な青少年時代にもかかわらず、ルードヴィッヒの名作たちは、過去の楽曲の形式と形態を綜合した、とんでもない緻密な構造を備えて産まれてきたことは看過できない。

［付属の「チュートリアル」参照］

アマデウスは音楽に造詣の深い父レオポルドが専任教師だった。バッハは父祖と教会音楽という教授たちに囲まれていたという違いはある。

２０世紀の天才物理学者アインシュタインにも言えることではあるが。微積分の解析学、微分方程式、ベクトル／テンソル解析、行列方程式などを暗記するほど修練してなければ、あの一般相対論方程式（呼称：宇宙方程式／テンソル型）は組み上がらない。曲面幾何学（リーマン幾何：テンソル解析）だけは研究最中にリーマンほかに示唆を求めたといわれるが。どこで彼は修得したのか。ありとあらゆる数学が凝縮されているこの方程式を作り上げたが、縦横無尽に解ける物理学者は、おそらく世界中でも２０人もいるかどうか。研ぎ澄まされた数学的センスとすさまじい数式展開技術が必要なのである。

最初にそのブラックホール解をあらわにしたシュバルツシルドは、一般相対論が発表されてから１年内に一つの特殊解を導いたのだから、ドイツにおける教育レベルは驚異的であった。第一次大戦で徴集され、彼は戦死してしまった。

ベルギーの牧師ル・メートルはなんとビッグ・バン解もみつけてしまって、逆にアインシュタインからたしなめられたそうな。数学的にはよいが、物理的意味はないと。それでもロシアのフリードマンは宇宙の膨張と収縮の臨界パラメータまで導きだした。本人の意向に関係なく『宇宙方程式』と呼ばれるようになったのである。最近では、宇宙初期のインフレーション解を佐藤勝彦博士が明らかにしたことも見逃せない。

まさに、超一流さえも魅了したのだ。アインシュタインも敬仰したマックスウェルの電磁界方程式（ベクトル型）は、電気・磁気、電波の態様を完璧に数式に置き換えた見事なもので、その解析には数多の数学を修めなければ不可能である。

いずれも、結果として宇宙の営みをあらわした方程式である。物質創成の基礎となったあの「対称性の自発的破れ」でノーベル物理学賞に輝いた南部陽一郎博士も宇宙方程式を絶賛していた。

【憧憬】

次の問題は、どうして何度も演奏されるのであろうか、ということである。

「そんなの当たり前だ。何をいまさら問題にするのか？」という叱責も当然である。実は、名曲として讃えられるためには、聴衆の人気に比べて演奏家の嗜好に負うところが少なくない。これは見過ごせない。

１９世紀はコンサート・ホールで、２０世紀になるとエジソン他の開発によりラジオやレコードが加わって、音楽を鑑賞できる機会が広く一般聴衆に拡がり続けてきた。今やＣＤからインターネットという便利なメディアに変遷してパラダイムつまり常識としての社会通念がシフトしても、天動説が地動説に変わっても、ルードヴィッヒ作品の演奏は増え続けている。数々の名指揮者、名演奏家が輩出して歴史的録音を残してこれでもう絶後と評価されながら、どうにも止まらない。特に、彼の交響曲、ピアノソナタ、弦楽四重奏曲、ピアノ協奏曲、ヴァイオリンソナタなどの全曲アルバムは名演奏家のほとんどが２０世紀に録音してこれで終わったと、皆が観念したのに。またぞろぞろと、新人たちにより新たなものが録られてきている。こんな点に気付くこと自体、重箱の隅をつつくようでおかしいが、実は本質を突いているのではないだろうか。

どうも、ルードヴィッヒは本能的に意識していたとしか思えない。それは、演奏家や作曲家というプロに対する誘惑である。演奏したくてしょうがなくなる媚薬を譜面に溶かし込んだのではないかとも想像してしまう。現代では、一般大衆が聴きたくなるように作曲するのが普通であるのに。

おそらく、宮廷のサロンに集まった数人の熟練弟子たちにまとめて演習させるには、こういった彼ら彼女らが競って楽器を弾いてしまうようにすることが捨て難い魅力になると、ルードヴィッヒは気付いたにちがいない。

故に、時代がいくら変遷しても、聴衆のニーズや流行にお構いなしに、ピアニスト、ヴァイオリニストや指揮者とオーケストラが演奏したくなるから膨大な録音が残り、現代でもさらに積み上がって留まるところをしらない。加えて、プロにしか理解できないようなエチュード（練習曲）に終始することなく、数多の美しい旋律は大衆を魅了して止まないのだから。

このことは、ルードヴィッヒの作品を即座に研究したシューベルト、ベルリオーズ、リスト、メンデルスゾーン、シューマン、ブラームス、ワーグナー、ブルックナーなど指折りの逸材たちまでもが、彼に夢中になってクラシックの黄金期を津波のように盛り上げたのである。彼らの憧憬はただただルードヴィッヒの作品に注がれたのである。なお、バッハはメンデルスゾーンとシューマンに研究され、再評価されてその偉名が１９世紀にとどろき渡ったことは特に記しておきたい。

シューベルトはルードヴィッヒの棺車の曳き手に加わったほど敬服していたそうである。

鍵盤上のアーティストのリストは１１歳でチェルニーに付き添われ５２歳の老匠にピアノ演奏を披露して頭を撫(な)でられた。そして、既に述べたように全交響曲をピアノ版に編曲して敬虔(けいけん)な貢献を捧げた。

交響曲第５番《運命》ハ短調　第１楽章　（1807年：36歳）

https://www.youtube.com/watch?v=rZSeupoLMFc

ワーグナーは第九の合唱にことさら感銘し、自ら１８４６年ドレスデンで「第九」を指揮して大成功を納めた。それを糧(かて)にして「楽劇」という新たなジャンルを開拓し、とくに第３楽章のアダージョを範にした「ジークフリート牧歌」を作曲したことは有名すぎる逸話でもある。

プロがプロに憧(あこが)れるということは、そのプロはもう神様になるしかない。だから「楽聖」と呼ばれるようになったのかもしれない。ところが、本人は、パトロンも、作曲家も、演奏家も、聴衆も、恋人さえも、お客様と思っていたことが覗(うかが)われてしかたがない。この点が、彼をして音楽史上、孤高の巨峰として聳(そび)え立たせてきた所以(ゆえん)ではないだろうか。このように楽界の大帝でありながら上からの目線はなぜか皆無でもあった。傲岸(ごうがん)な態度とは裏腹に。

【掛合い】

セッションという言葉がある。もともとは会議という意味であるが、ジャズの世界では常用されており、マイルスとコルトレーンのセッションと言えば、ジャズ・フリークには瞬間的にあれとあれというふうに数曲を想い出し、話は弾(はず)んで止まらない。音楽に焦点を絞(しぼ)ると、対話、掛合いなどになろうか。激しいものはバトル・セッションともいう。

これが「春」において見事に仕組まれている。

Ｖ：最初はこれでどうだい

Ｐ：いいね、君のとおりなぞってみるから

Ｖ：次は違うからね

Ｐ：からんでみる

Ｖ：こんどは僕が追い駆ける　　・・・・・（以降同様に）

つまり、宮廷や小劇場における室内楽の演奏では、プレイヤー同士のセッションがあると盛り上がるという現象は捨て難い。単なる合奏では無く、それぞれが掛け合うと聴衆も思わず引き込まれてしまうのだ。「春」ではまさに草木の息吹(いぶき)と動物達の華(はな)やぎとの掛合いに彷彿(ほうふつ)とさせられる。

それから、おなじ

ヴァイオリンソナタ第７番第２楽章アダージョ・カンタービレ（３３歳）

https://www.youtube.com/watch?v=iVr9OoKkCps

では、信じ難いほどのヴァイオリンとピアノの「緩(ゆる)やかに歌うように（アダージョ・カンタービレ）」掛合いが演出され、優美な旋律の悲痛なくだりには、思わず心が奪われてしまう。

いつのまにか、ヴァイオリンソナタではなく「ヴァイオリンとピアノのためのソナタ」という曲名に変わってきた理由(わけ)がそこにある。すなわち二つの楽器は同等に扱われており、アマデウス以前にはピアノは伴奏の位置が基本とされていたから、まさにルードヴィッヒの信条どおり嵐のように古い壁を吹き飛ばして、一つの衝動的「革新」が産まれたのである。それでも、さすがにバッハのフーガの技法だけは古くとも見捨てることは出来ず、交響曲第３番英雄(エロイカ)や弦楽四重奏曲「大フーガ」Op.133、ピアノソナタ第３１番など傑作の中に採り入れた。

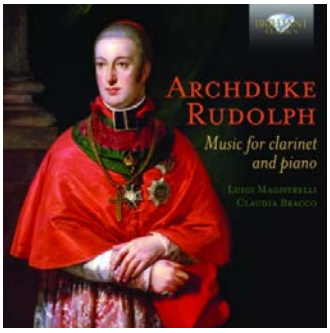
それに加えて、「掛け合う二種の楽器」において演奏家どうしが相互対話（インタラクティブ・セッション）するという醍醐味(だいごみ)が味わえる。さらに聴衆が堪能できる優美な、ときには劇的な旋律もあって彼ら演奏家はあとで禁断症状になることは分かっていても、酔い痴(し)れたにちがいない。だから、ピアニストやヴァイオリニストたちがライブやスタジオ録音でルードヴィッヒの曲を採り上げる回数が増えてしまうのだ。すなわち、プロに惚れ込まれたプロたる所以(ゆえん)でもある。

加えて、脂(あぶら)が載りきった４１歳のとき、ルドルフ大公に献呈★した

ピアノ・トリオ第７番『大公』

https://www.youtube.com/watch?v=cRe-8WGHSF8

は、さらに“セッション”としての絡(から)み合いに磨きがかかった傑作である。これは三つの楽器の三重奏であるから、作曲技法としては高度なものが必要となろうが、そんな理屈でのギコチ無さは皆無であり、どこまでも滑(なめ)らかでおおらかな調べである。



ルドルフ大公

https://www.google.co.jp/search?q=ルドルフ・ヨハネス・ヨーゼフ・ライナー・フォン・エスターライヒは、神聖ローマ皇帝レオポルト2世の末子。1819年にオロモウツ大司教と枢機卿に選出された。

★　献呈とは「曲を誰々のために捧げる」という意味であり、そっくり譲渡するということではない。著作権という概念はなかったが、出版する版権があり、これは作曲者本人からは動かない。いつのまにか、作品には献呈先をつけることが習わしとなったようである。

たとえば、１９６０年代の巨匠(マエストロ)達であるケンプ（Ｐ）、シェリング（Ｖ）、フルニエ（Cello）という三者が和(なご)やかに楽器談話して、曲調にうっとりと弾いたり、技を自慢したり、次を誘ったり、そして皆で合奏したりしている雰囲気が鮮やかである。“掛合い”がこの曲に至ると一体化して一つの楽器ともいえるほどにオーガナイズされる。究極のバンド演奏とも言えよう。

これこそトロイメライとも言える第３楽章は、変奏曲形態であるが、白眉は第３変奏である。ペルシャ絨毯のようなピアノ・トレモロのうえで、ヴァイオリンとチェロが、じゃれあ

ったあと幼児がラブラドール・レトリーバーに抱かれながらふたりで昼寝するシーンが瞼にうかぶ。この世のものとは思えない。

だから、ミュージシャン同志に相互敬愛と協調がなければ凡作になってしまうかもしれないものでもあるが、かれらは弾きたくて集まり大作の楽譜を鮮やかな現実の豊かな調べに変換するのだ。それほど、演奏家にとって戯れの逸品なのであろう。つまるところ、いまだに世界のトップ・プロさえもファンにしてしまうルードヴィッヒ。

https://www.google.co.jp/search?q=

献呈したルドルフ大公は神聖ローマ皇帝の末子という貴公子で、長年、ルードヴィッヒの弟子でありパトロンでもあった。とにかく付き合い難いピット・ブル*のような、１８歳年上の気難しい聾の音楽教師に、若い大公は不思議になじみ、１５歳頃の少年時代から長年に亘りよく教わった。筆談という障壁を超えて。ルードヴィッヒもこの初々しい殿下には不思議によくなついた。

（＊　ピット・ブルとは、ブルテリア交配種で「アメリカン・ピット・ブルテリア」の略称であり、史上最強の獰猛な闘犬である。自分の体長の2倍以上もある他の闘犬や野生の狼にも襲いかかる。その闘争心は飛び抜けている。闘犬マッチで土佐犬に勝ち、日本でも有名になった。散歩の途中でもすれ違う人や他の犬と目が合い眼（ガン）つけ、つけられると即座に攻撃的になる。米国では、その顎力と牙の鋭さゆえに殺人犬として厳重注意されているが、番犬として重宝がられている。とにかく飼われた主人には非常によくなつくようだ。
　シートン動物記では「犬のスナップ」として登場するが、最後は狼の鼻に喰いついて最後まで離さず悲劇的な死をとげてしまう。正に特攻犬である。）

【ゲーテ】

権威に対するルードヴィッヒのアグレッシブ（攻撃的）な逸話としては、１８１２年、ドイツ各地から有名人が呼ばれたテプリッツの晩餐会が開かれた。その翌日、親の歳に近いゲーテ（６３歳）とルードヴィッヒ（４２歳）は談笑しながら夜の庭園を散歩していた。その時に、前方からワイマール大公の一団がやってくる。ゲーテはワイマール大公の枢密顧問官であった。

『　―昨日、我々は帰り途でワイマール大公家全部の方々に出くわした。その方々が向うの方から近づいて来られるのを我々は気付いたが、そのときゲーテは私の腕を離して道の脇へ退いて、私が何と言っても彼を一歩だに前へ歩かせることは出来なかった。私は帽子をしっかりとかぶって、フロックコートのボタンをはめて、両腕を背中に組んで、雑踏している人波の真中を進んで行った。――君候たちと侍臣たちとは列を作って並ばれ、ルドルフ公は私に向って帽子を取られ、大公妃も私に先んじて御挨拶をなさった。――大公家の方々は私がどんな人間かをご存知なのだ。――ゲーテの方を眺めると、一行が彼の前を通り過ぎて行かれる時、帽子を脱ぎ低く腰を屈めて脇のほうに立っているので、私は可笑しくなった。後で、ゲーテをたしなめた。』

（ベートーヴェンのベッティーナ・ブレンターノ宛信書より。ベートーヴェンの音楽の価値をゲーテに説いたのは彼女であった。）

［ロマン・ロラン「ベートーヴェンの生涯」（片山敏彦訳）より］

ベートーヴェンとゲーテ

http://www.ihatov.cc/blog/archives/2006/10/post_416.htm

さもありなん。

それは別として、巨人二人の邂逅（かいこう）では妻への手紙でゲーテに言わしめた。

〔　私はいままでに、これほど強い集中力をもち、これほど精力的で、しかも内面的な芸術家というものを見たことがない。〕

しかし、ゲーテの音楽顧問的なツェルター（1758～1832）宛の手紙の中で、ゲーテは次のように批判していた。

〔　ベートーヴェンとはテプリッツで知り合いになった。その才能には驚嘆したが、彼の不幸は、奔放きわまる個性をもっていることで、世界を嫌悪すべきものとみなす点は、間違いとも言いきれないのであるが、自分の態度によって、自分や他人のために、世界をいくらかでも楽しいものにする気が、とうていないのである。とはいっても、彼を弁護することは容易だし、大いに同情されるべきなのだ。というのは、聴力を失いつつあり、その点がたぶん、天性の音楽的な面よりも、対人的な面を損じているわけだから。彼はぶっきらぼうな性格であるが、この欠陥が災いして、二倍もそうなってしまうことだろう。〕

ルードヴィッヒからすれば、内心は「フン、俺の曲を余り聴いてなかったくせに」。

一方、ルードヴィッヒは友人への手紙に書いたそうな。

〔……ゲーテは宮廷の雰囲気が気に入りすぎている。詩人に似つかわしくないくらい。国民にとって最上の教師たるべき詩人たちが、こうした華やかさのために、

ほかのすべてを忘れ果てているなら、演奏名手たちの愚劣さを、だれが嘲笑(わら)えるか。〕

（以上、〔〕部分の引用は<http://www.mumyosha.co.jp/ndanda/09/beethoven04.html>より）

年配のゲーテは、巨匠としての大度の手本を示したつもりのようであったが。

それまで、ゲーテの作品に対して

悲劇『エグモント』への音楽（序曲と9曲）Op.84（1810年）

https://www.youtube.com/watch?v=WDX5OArGe_g

ベートーヴェンは、ゲーテの書いた悲劇『エグモント』が劇場上演される際の音楽を依頼され、序曲と、9曲の小品を作曲した。この序曲は、1810年に作曲。この劇は、16世紀にオランダがスペインから独立しようとする際の、反スペイン運動の英雄エグモントを描いている。エグモント伯爵は祖国の独立のために立ち上がるのだが、反逆罪で捕らえられ、処刑されてしまう。しかし、死刑執行の直前に、彼の婚約者で服毒自殺していたクレールヒェンの幻影が現れ、エグモントの勇気と正義を讃え、彼の行動を祝福する。彼の死は、愛によって救済される、という結末。
<http://wood248.blog.fc2.com/blog-entry-102.html>

という作品を創ったほど、ひたすらにゲーテの詩作品を敬愛していたのである。シュトルム・ウント・ドラングの主導者の一人でもあったのだから。

人は友人や知人、あるいは有名人を評価する時に、度々、ミスを犯してしまう。その人の行跡をろくに調べもせず味わいもせずに言い切ってしまう。ゲーテほどの大家でもこの始末だった。己の作品に見事な曲を付けてくれていたのに、聴きもせずに（いや聴いてないとしか思えない）ゲーテはルードヴィッヒを奔放(ほんぽう)な音楽家程度にしか見なかったのである。名曲「エグモント序曲」だけでも聴いていたら、そのような批判にとどまるはずはないと誰でも想像できる。

テブリッツでの邂逅(かいこう)以降も、ルードヴィッヒは、そんなゲーテに敬服し続け、ゲーテの詩による作品１１２：カンタータ「静かな海と楽しい航海」（1815年）は彼に献呈したそうである。

ルードヴィッヒ信者(フリーク)の小生からみると、ゲーテは、たとえばルードヴィッヒの作品で感銘を受けたとしたら、それについての随筆なり叙事詩なり創って返礼すべきであろう。事前に、ベッティーナ・ブレンターノ女史の克明な説示が無ければ、少なくともルードヴィッヒの音楽については、彼は盲目で聾(つんぼ)同然であったにちがいない。さらに、彼女がどうしてエヴァンゲリスト（伝承者）として、それほどルードヴィッヒ芸術に染まったのか、という疑問すら沸かなかったようでもある。あるいは、ゲーテは音楽に不感症であったのか、それとも音楽難聴だったのか。だとしたら、彼自身が音楽聾(つんぼ)であるから、ルードヴィッヒの聾疾(ろうしつ)も傲岸(ごうがん)な態度も批判することはできないし、まして同情するなどもってのほかである。

（私はゲーテ作品について無知であるから批判はできない。しかし、状況判断による単なる空想が許されるとしたら、ゲーテは文学のほうが音楽よりはるかに芸格が上だという独自観念に染まっていたのかもしれない。だから、文学作品に音楽が付くのであって音楽に文学は付かないと信じて疑わなかったのではないか。さらに、ルードヴィッヒはゲーテに対してゲーテの作品に付けた楽曲の献呈という極上のプレゼントをしたのに。ゲーテが同じ芸術家という「士俵」に立つ気があったのなら、どうしてそれらに返礼しないのか。後に、ワーグナーやロマン・ロランにひっくり返されるのだが。その時には二人ともこの世にいなかった。）

ゲーテ・ファン側からの評価は何とも言えないが。文豪ロマン・ロランに書かれたことで、反論は限りなく弱まってしまったことには同情を禁じ得ない。

ただ言えることは、ルードヴィッヒは、まさに４２歳の彼は、悪魔（デモン）の聾疾（ろうしつ）を自らしのいで築いた楽曲王国の大王（レックス）であり、世襲という棚ボタ権威だけの王朝もそれに諂（へつら）う人々も敵（かな）うわけがない。王侯達が民衆からの搾取（さくしゅ）という大罪に問われ始めた時代でもあったことは「フランス革命」と「ナポレオン戦争」で明瞭である。すなわち、統治とは国の豊饒（ほうじょう）に務め、安全を維持することである。平和が続くと王侯たちは何の血も汗も流さず世襲が続いて創業王の労苦を神棚にあげて、怠慢（たいまん）と堕落がはびこり、統治者と民とのバランスが失われて王族貴族の富裕だけに偏（かたよ）ったから転覆（てんぷく）という革命が起きたのである。つまり、国家の繁昌は民衆イコール生産者に還元されるべき社会の到来が望まれ始めたのだ。

だから、音楽家、いや文学者といえども貴族に比べて圧倒的多数の民衆に幸福を贈れなければいけないと、早くからルードヴィッヒは「使命」として脳裏に刻み込んだ。ただし、彼のスポンサーに王侯貴族が多すぎたことには、少なからず忸怩（じくじ）たる想いが絶えなかったはずである。ゆえに、それを民衆に自らの音楽で還元すべきと余計に強く念じたにちがいない。現在の著作権法に基づくロイヤリティ（印税）という直接収入源の仕組み、すなわち聴衆の喜びという人気がふりかえって作曲家・作詞家に金額で還付されるのであるから、ストレートに幸福を贈れた結果が判明する。こういったシステムが無い時代でもあった。

そのように彼は完璧に意識していたが、己れだけの自信というのは寂しいということも痛く認めていたのであろう。故に、民衆の反応をみたくて、おおきな夢であり続けた『第九』の大観衆ライブ実現に晩年の彼を駆り立てたのかもしれない。

やはり、彼は真の不羈（ふき）の快人であった。ゲーテと対比してはいけない。

【パトロン】

あれほど王侯・貴族に対して傲岸であったルードヴィッヒにとって、ルドルフだけは特別に可愛い公子であった。ピアノ・トリオ「大公」のほか、あの絢爛豪華なピアノ協奏曲第５番「皇帝」、『荘厳ミサ曲』やピアノソナタ第２６番「告別」など数々の傑作をルドルフに献呈してきた。

（この頃の献呈とはパトロンからの手当て支給に対する返礼でもあった。）

特に、

ピアノソナタ第２６番「告別」

https://www.youtube.com/watch?v=Iy9C5xZVnBE

には、次のような背景が伝えられている。

> 1809年、フランスと戦争状態にあったオーストリアは、同年四月のナポレオン軍によるウィーン進駐を受け、王侯貴族らが、ウィーンを脱出、疎開することになった。当然大公もウィーンを離れることになり、それを受けてベートーヴェンが大公が出発した1809年から戻ってくる翌1810年にかけて書いたのが「告別」であった。
> 〈http://www.rutsuko.com/k/p/01.html〉

このため、この曲は３楽章がそれぞれ「送別」、「不在」、「再会」と物語のように標題が付けられている。そのとおり完全にその人のために創って、見事に淋しさとそれが解消された喜びが綴られている。そう、特に第３楽章の嬉しさは例えようもない。大公殿下へのルードヴィッヒのすなおさが出て、その子供のようなはしゃぎように、待ちに待った主人の帰宅に（短い）尾をふりまくるピット・ブルのように見え、思わず目頭がうるんでしまう。

ルードヴィッヒがピアノソナタに標題を自らつけたのは、この「告別」とピアノソナタ第８番「悲愴」だけである。さらに第３楽章「再会」には「敬愛するルドルフ大公殿下帰還、１８１０年１月３０日」と書き込まれているようだから、３９歳のルードヴィッヒは２１歳の大公を、最愛の貴人と想っていたことが覗い知れる。ルドルフ自身はルードヴィッヒの薫陶を真摯に受けた成果として、幾つかの自作品をあらわしたほどである。

その他にも、若き日のルードヴィッヒを支えたリヒノフスキー侯爵、ピアノソナタ第２１番「ワルトシュタイン」で有名なワルトシュタイン伯爵、弦楽四重奏曲第７～９番の題名にもなったロシアのウィーン駐在大使ラズモフスキー伯爵などきりがない。それぞれに逸話があるけれども、彼らはルードヴィッヒを支援しなければ、余多の貴族たち同様に歴史に刻まれずに埋もれて終わったのである。いや、寧ろ彼らは慧眼を持っていたと言うべきか。

少年アマデウスは、マンガ「巨人の星」の星一徹みたいな熱血教師の父レオポルドに連れられて巡業のようにヨーロッパ中の宮廷を廻った。即興演奏や作品を披露しながら求職活動を行ったが、余り成功しなかったことに比べると、ルードヴィッヒは何と幸福であったか。

それぞれのウィーンでの葬儀においては、アマデウスは数人の参列で淋しく葬られていたのに、後々に場所が判別できないような共同墓地に。ルードヴィッヒの時には２万人を超え

たという。シューベルトの墓石は遺言どおりちゃっかりとルードヴィッヒの隣に居座っている。死んでからも敬愛された連れがいるなんて、しかも空前絶後の「歌曲(リート)の巨人」であるから、そんな凄いプロに死後も慕(した)われるプロなんて聞いたことがない。

ベートーヴェンは1827年3月26日にシュヴァルツシュパニエルハウスで他界(56歳)。
葬儀は29日にドライファルティッヒカイト教会で行われ、ヴェーリンガーシュトラーセのヴェーリング墓地に埋葬。
この時ベートーヴェンの棺を担いだシューベルトも翌1828年11月19日にわずか31歳で亡くなり、「ベートーヴェンの近くに葬ってほしい」という遺言どおり、ベートーヴェンの隣に葬られた。

http://www.nakash.jp/opera/2008wien/07schubert.htm

【遺書】

何の惧(おそ)れもなく、伸び伸びと満開に咲き上がったルードヴィッヒの青年期の末（２６歳～）に、次第に暗い影がさしてきた。それは、ときどき耳鳴りを伴って聴こえなくなる病(やまい)であった。年を経るごとに難聴が深さを増してくる。秘(ひそ)かに医者の診断をあおいだが、どうも不治のようらしく、しかも進行性で如何(いかん)ともし難い。やがては完全に音の無い、耳鳴りさえも消える闇(やみ)に落ち込んで行く。どうしたらいいのか判らない。音響の世界から外れると言うことは、もう「さらばピアノ」である。想い女(ひと)に恋を打ち明けるにしても、相手の言葉が良く聞き取れないから一方的になってしまう。絶望の淵の瀬戸際(せとぎわ)に立ったルードヴィッヒ。悪夢であって欲しい。

音楽家からその武器とする聴覚が失われるということは、ほとんど死を意味する。視覚を失っても名画を残した画家はいない。でも、それらを両方とも幼少期に壊滅させられた“ヘレン・ケラー”だけは、我々は忘却できないが、己れにそういった障碍(しょうがい)を投影してみると想像を絶する。いかに僕たちは幸福か。

ベートーヴェン・ハウス（ボン）における悩めるルードヴィッヒ

そういった絶望と悲嘆は、

弦楽四重奏曲第７番ヘ長調「ラズモフスキー第１番」（1806年）

第３楽章　アダージョ・モルト・エ・メスト

モルトは「さらに」、メストは「悲しく」

https://www.youtube.com/watch?v=aBvQJ-wNE24

を聴くと、深々と心に響いてくる。これほど痛々しい胸の内は、アマデウスの「ラクリモーザ：涙の日」以来聴いたことが無い。心の傷が深すぎて染みだして止まらない真紅の血、それを吐露(とろ)する調べ、慰(なぐさ)めようもない絶望、いくら同情してもとどかない悲哀、よくぞ書き上げたものだ。

魂がボロボロになってしまった３５歳の傲岸無比(ごうがんむひ)の恋多き男。めったに現わさない心の深奥を、こんな楽曲に秘(ひそ)かに埋め込んでいた。心は、あたかも硬い殻と白味に包まれた卵黄のさらにその中心であるラテブラのようで、外からは絶対に見えない。他人がいくら黄味を突(つつ)いてもかわされてしまう。力でこじ開ければ攪乱(かくらん)されてしまい判別がつかなくなる。自分が無理に切り割(さ)いて開けたとしても、激痛に七転八倒(しちてんばっとう)してしまう。

ところが、難聴という彼の懊悩(おうのう)は卵核ラテブラの痛みに忍び泣き、このような曲に出現したのだ。長かった私のクラシック巡礼の末にやっとたどりつけた、彼の絶望感の一端に。

しかし、こういった悲痛極(きわま)りない旋律を抱(いだ)きながらも、彼は心気逆転を遂げた。３１歳のときの

『ハイリゲンシュタットの遺書』：１８０２年１０月６日

である。聾(デフ)ゆえに人との会話にぎくしゃくするウィーンの街がうとましくて厭世(えんせい)したくなり、郊外の風光明美なハイリゲンシュタット村に別荘を構えて季節に応じて移り住んでからである。さすがにこの本音の遺書は他界してから彼の書斎で発見された。これは二人の弟に宛てられた。彼の絶望感よりも心の痛みがひしひしと聴こえてくる。奈落の底の悲鳴が次のような節にあらわれている。

> ああ！　他の人々にとってよりも私にはいっそう完全なものでなければならない一つの感覚（聴覚）、かつては**申し分のない完全さで私が所有していた感覚**、たしかにかつては、私と同じ専門の人々でもほとんど持たないほどの完全さで私が所有していたその感覚の弱点を人々の前へ曝(さら)け出しに行くことがどうして私にできようか！

そして、ルードヴィッヒは次のような決意を表明した。

> たびたびこんな目に遭ったために私はほとんどまったく希望を喪(うしな)った。みずから自分の**生命を絶つ**までにはほんの少しのところであった。――私を引き留めたものはただ「芸術」である。**自分が使命を自覚している仕事を仕遂げないでこの世を見捨ててはならない**ように想われたのだ。

すさまじい自覚である。世界は自分を待っていると心底(しんそこ)、確信していたのである。

> ・・・神よ、おんみは私の心の奥を照覧されて、それを識(し)っていられる。この心の中には**人々への愛と善行**への好みとが在ることをおんみこそ識っていられる。

まさに、かれは音楽が世の中に貢献することを意識していたし、それが２２歳からの夢だった。ゆえに、絶望に澱(よど)みきった曲はなく最終楽章は必ず人々に向けて喜びに満ちた凱歌(がいか)をあげている。第九の「歓喜の歌」が代表的で、第５番「運命」と第７番の第４楽章は正に、聾疾(ろうしつ)という悪魔に勝ちきった絶頂感をあらわしている。

> ・・・　そして不幸な人間は、**自分と同じ一人の不幸な者が自然のあらゆる障碍にもかかわらず、価値ある芸術家と人間との列に伍せしめられるがために、全力を尽した**ことを知って、そこに慰めを見いだすがよい！

（以上、教科書体部分はロマン・ロラン「ベートーヴェンの生涯」（片山敏彦訳）より引用）

こうしてルードヴィッヒの夢たちはことごとく雪崩たようにみえたが、彼は神に引きちぎられた自らを督励して克服した。
蓋し「絶望と希望」の凄絶な闘いである。不撓不屈の精神力である。

現代でも、彼の魂の痛みに酷似した例がある。ケンブリッジ大学の理論物理学者：スティーブン・ホーキング博士（１９４２年～）である。筋萎縮性側索硬化症（ＡＬＳ）という進行性難病が２５歳ごろから発病して、自律神経系を除く全ての筋肉が効かなくなって鉛筆も持てず話もできず、数式展開、方程式の解析などの研究のほか、論文記述や講演ができなくなった。いわば理論物理学者がペンもマウス（口）も奪われたのであるが、ＩＴの適用でそれらに替わる利器が使えたからかろうじて１０％ほど救われた。しかし、ルードヴィッヒと同じように３０歳前後で絶望という名の地獄は逃れられなかったはずだ。その奈落から見事に這い上がって、一般相対論と量子論の合成理論を発表したり、「ブラックホールは蒸発するという『ホーキング輻射』」を予言したことは有名である。そして１９７９年、ニュートンと同じケンブリッジ大学ルーカス教授職に任命され、イギリス物理学界の最高栄誉に輝いた。障害者でありながら世界のトップ・ランナーとして物理学界を牽引してきている。

http://blogs.yahoo.co.jp/eraser1eraser/65420255.html

もし、ルードヴィッヒにも現代の精密技術による高性能補聴器（耳朶のなかに収まる超小型）がタイムスリップして手に入ったなら、彼は感涙にむせぶだろうか。いや、「常の道」に戻って別の彼、「道の道」を極めない三流音楽家になってしまうかもしれない。なお、ボンのベートーヴェン・ハウスには幾つかのごっつい補聴器が、必死さを物語るように展示されている。

ルードヴィッヒが使った補聴器（40～50 cm）
www.geocities.jp/fdtsh088/kataoka3.html

現代の超小型補聴器

http://koiwa-hochouki.jp/hearingaids/features.html

この二人には、同じ人間として敬服する以上に、その心機逆転という強固な意志の昂揚には、我々凡人のやるせない自堕落や身勝手な嘆きなぞ、消し飛んでしまう。

しかも、同じ歳でルードヴィッヒは暗く落ち込んでも、あでやかな「春」を書き上げている。自然の神々を謳歌した「田園」は、この遺書から数年経った３７歳であるから、そこで宣言したとおり見事に己れの使命を果たしたのである。

誰がおもうか、あの聾なのに傍若無人な奴が創ったと。その創作熱は核燃料の如くアンタッチャブル（触れない）だから、その真の凄さはプロしか理解できなかった、魂がズタズタに引き裂かれても卑屈にならず、その神々しいまでの大らかさは障害者しか感じ取れなかった。常に抱えていた心の激痛と爽快の対極は、その離隔の距離感は宇宙規模ともいえる。だから、プロも誰か真似したかもしれない。ピアノやヴァイオリンなどで一切の試奏なしに、ハミングも禁じて楽譜を書いて出版した後輩がいたのではないかと想像したくなる。

まさに「道の道とすべきは常の道にあらず」と総括した老子の名言どおり。

そして、ロマン・ロランをして「傑作の森」と言わしめた３０代（１８００～１８０９年）を疾風怒濤のように突き抜けたのであるが。

【失恋】

彼は、恋愛の達人ではない。どちらかといえば、失恋症候群の常習患者だった。

ウィーンの町では知らぬものがいないほどの楽壇の「巨匠」であったから、王侯・貴族のサロンにあっては、ピアノ習いたてのいまだ汚れを知らない夢だらけの乙女たちに囲まれすぎていた。どうみても貴公子然にはみえない、どちらかというと田舎者風貌だから、特段の才能がなければ場末の酒場での「流し」程度で終わったはずである。

W･J･メーラー作
4枚のベートーヴェン肖像画（34歳）のうち最初のもの。彼自身が所持し、死後甥の所有となった。

ところが、めくるめくピアノの即興演奏技術に加えて、聴いたことも無い魅惑的な旋律を耳にしたとたん、彼女達は胸がときめくのを抑えきれなくなって、彼の虜にされてしまった。映画「パガニーニ」では、ケダモノみたいに傍若無人なニコロ・パガニーニ（1782-1840）を嫌い抜く、うら若き美女が、

「愛しい人に」

パガニーニ: ヴァイオリン協奏曲第4番 ニ短調 第2楽章

https://www.youtube.com/watch?v=I8SNwOPiCgA

の演奏を聴いた途端に、憑かれた亡霊のように彼に近づいていく情景ほど、それを物語っているものはない。そして、パガニーニの伴奏でその曲を歌ってしまう。いい加減にしてほしいと、世界中の騎士たちは嫉妬するだけであろう。

ピアノやヴァイオリン演奏は婦女子の基本的素養の一つでもあって、それぞれ親が家庭教師を探して一流の演奏家に鍛えられて腕も磨かれ耳も肥えているはずなのに、その感覚水準がことごとく灰燼に帰してしまったのである。禁句になるが、もしカラヤンのような目の覚めるような美男子だったら、その場で少なくとも２，３人の公女たちは卒倒したかもしれない。が、天はルードヴィッヒに二才能を与えなかった。

そこいらの音楽教師なら、乙女たちのフェロモンに包囲されたら悶絶してしまう。しかしながら、彼女達を魅了してやまない楽曲を創って奏でられる超特技をルードヴィッヒは持っていたのだから、放たれる妖しげな匂いなど即座にルードヴィッヒ楽興に圧殺されたにちがいない。

１０年ほど前に、映画「不滅の恋／ベートーヴェン」（バーナード・ローズ監督・脚本）が封切られた。あとでじっくりとＤＶＤで鑑賞したところ、その衝撃に打ちのめされ、特に主演のゲイリー・オールドマンの熱演にもほだされ、しばらくその後遺症に悩まされた。これまで、芸術家には、ディズニーの「白雪姫」や「眠れる森の美女」で有名な“白馬の騎士”はいないと観念していたから、その衝撃の深さには正直まいった。しかも、冒頭から

荘厳ミサ：ミサ・ソレムニス　ニ長調 作品123

https://www.youtube.com/watch?v=cHw6M-7HW-I

のキリエ・エレイソン（主よ憐れみたまえ）に誘導されるルードヴィッヒの葬儀、ウィーン市民２万人以上も参列者がでて、その騒然たるや映画「ベン・ハー」でみられるローマへの凱旋に比べても劣らないパノラマに圧倒される。

いったいどこの大王が崩御したのか？

さて、本題はルードヴィッヒの恋愛悲劇である。

（青木やよい著「ベートーヴェン＜不滅の恋人＞の謎を解く」を参考にしながら）

最初は、ブルンスウィク家のテレーゼ、ジョセフィーヌとともにピアノ・レッスンの教え子であったジュリエッタ・グィチャルディ。テレーゼの従妹で１７歳の彼女は美貌で妖精のようであった。彼女のほうも憧憬もあって積極的に恋愛関係まで発展したが、男をもてあそぶ本性を有していた。惚れ込んだ３０歳のルードヴィッヒは振り回された。彼はなんとか求婚したけれども、彼女がイタリア貴族の令嬢という身分の違いに加えて聾疾の進行もあって敬遠され、失恋の奈落に落ち込んだ。「ハイリゲンシュタットの遺書」を書いた１８０２年の前年である。結局、身勝手で奔放な彼女は伯爵夫人になってしまった。

ジュリエッタ・グィチャルディ

しかしながら、映画「不滅の恋」においては、彼女が盗み見している状況で彼女に捧げた

ピアノソナタ第１４番「月光」嬰ハ短調（３０歳）

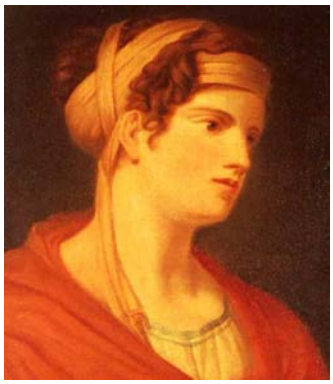
第１楽章　アダージョ・ソステヌート（緩やかに、音の長さを十分保って）

https://www.youtube.com/watch?v=O8i42r6hxuA

を秘かに演奏するルードヴィッヒのシーンには、男でも痺れてしまう。彼女に想いを込めているように見えながら、はるかに幻想的なのである。要するに人間的な恋情ではなく、異次元での法悦感が漂っている。故に、ジュリエッタの行く末に関係なく絶品の名曲として永久に生き続けるのだ。しかも、彼は難聴が進行していたから、それをカバーする演奏姿勢には憐憫の情につまされてしまい眼がしらも潤んで来る。そういった演出も見事。実は、この『月光』を最初に彼が弾かせたのは後で出てくるジョセフィーヌであった。

次に、彼の関心はジュリエッタの従姉(いとこ)であるテレーゼに移る。ハンガリーのブルンスウィク伯爵の長女テレーゼは、教養豊かで自立心旺盛な女傑であったという。ルードヴィッヒより３歳年下で、熱烈なファンでもあり良き理解者だった。３５歳になったルードヴィッヒと婚約したという事実無根の話も浮上したほどである。彼女との関係は純なプラトニックであり次の佳曲を捧げた。

テレーゼ・フォン・ブルンスヴィック



ピアノソナタ第２４番『テレーゼ』（３８歳）

https://www.youtube.com/watch?v=af9wN3obed4

しかし、彼の恋情熱は、テレーゼの妹であり一緒に彼のピアノ・レッスンを受けたジョセフィーヌに注(そそ)がれた。天性の優雅さと繊細な感受性を持った美人だが、テレーゼとは正反対に周囲に依存する体質の持ち主でもあったという。ところが、姉妹間の牽制(けんせい)と親元からの勧告もあって関係が容易に進展せず、結局、４０歳以上も年上のダイム伯爵と結婚してしまった。１８０４年、不幸にも夫君が急死。ルードヴィッヒは、落ちこんで窮乏していた２４歳の未亡人と４人の子供達の生活まで支援してきたのに、子供らの家庭教師のシュタッケルベルグ男爵と再婚してしまった。２人の子をもうけたが、夫君の放蕩(ほうとう)で生計自体も困窮して、夫婦の不和が続き離婚争議まで発展していた。１８１２年頃、７番目の子供をルードヴィッヒが産ませてしまったという噂まで後世の研究者がみつけた。その女の子（ミンナ・ベートーヴェン）の出産と育児を助けた姉テレーゼ。その彼女に「気高い厳粛な気持ちで、・・・子供に備わる神性を何も損なわないように」と言わしめたらしい。テレーゼだけは早逝(そうせい)することなく、ヨーロッパで初めて幼稚園設立とその経営に残る人生を捧げ、８６歳まで生き抜いた。病弱なジョセフィーヌは、１８２１年４３歳で他界した。

ジョセフィーヌ・ブルンスヴィックの肖像画

まったくもう、彼は“ドンファン”といってもよいほどである。しかし、どちらかというといずれの女性も彼に積極的だったことは確からしいが、それにしても。

四番目の恋人は、人妻であるアントーニアである。

幼くして母を亡くした彼は、母性愛に飢えていたのだろうと想像すると、彼女にそれを見たのかもしれない。彼女は既に４人の子を産(な)していたが、富豪の夫君フランツとともにルードヴィッヒのスポンサーであり、かつ気難しい聾(デフ)の巨人をよく理解してくれた。アントーニアは夫との仲違(なかたが)いが進行したことと、どうしても彼の商売環境の煩(わずら)わしさによる住みなれないフランクフルトが嫌で、心身症に悩まされた。かねてから父の館がある故郷のウィーンへ移住したくなり、１８０９年（２８歳）頃、実父の他界により一時的に可能となった。これが二人の許されざる関係に発展したといわれている。ジョセフィーヌにふられた後であるから、ルードヴィッヒにはまたとない機会となった。しかも、清楚な才色兼備の女性であった。これは、彼のコンプレックスで女性に憧(あこが)れる主要なポイントであったが、友愛から恋愛に発展したい恋心は如何(いかん)ともし難い。

アントーニア・ブレンターノ夫人の肖像画

http://www.ri.kunitachi.ac.jp/lvb/rep/houkoku01.pdf

ヘンデルやハイドンがそうであったように大英帝国のフィルハーモニー協会から勧誘があり、アントーニアとの駆落ちが可能となるロンドン移住という手段が俄(にわ)かに浮上した。しかし、ウィーンの大尽(だいじん)たちが騒ぎだし、結果、ルドルフ大公など王侯貴族３人から年金４千フローリン（現在価格に想定換算：１千万円ほど）給付という約束で引きとめられてしまった。ただし、最初の数年を過ぎると支給が途絶えた。アントーニアも６年間の別居生活を戻して旦那の第六子を懐妊し、ルードヴィッヒとの恋愛も泡沫(うたかた)のように流れたのである。しかし、ブレンターノ夫妻ともに友愛はルードヴィッヒが死ぬまで続けられ、彼女は８９歳の長寿を全(まっと)うした。

それほどあっちこっちで失恋しても、疲れを知らない子供のように３７歳頃にはエルデーディ伯爵夫人と一時的に同棲していた。しかも、ルードヴィッヒの女性関係の愚痴ばかりに理解を示し、彼女は「懺悔(ざんげ)聴聞僧」とも彼に言わしめた。途中離れても１０年以上も長いスポンサー関係が続いたそうである。映画「不滅の恋」でも、彼女がルードヴィッヒの恋人達をたどるキー・パーソンとして登場するほど彼の多くの恋愛事情を記憶していた。

ルードヴィッヒの女性陣 （参考:1800 年＝ルードヴィッヒ 30 歳）

恋人／想い人	年	成否	献呈
マグダレーネ・ヴィルマン	1795	有名アルト歌手、求婚・・・無視	ー
ジュリエッタ・グィチャルディ → ガルレンベルグ伯爵夫人	1800～ 1802	イタリアのグィチャルディ伯爵令嬢であり、テレーゼの従妹 1802年求婚・・・破談 『不滅の恋人』第1候補	ピアノソナタ第14番「月光」 （1802年ハイリゲンシュタットの遺書）
テレーゼ・フォン・ブルンスウィク → シュタッケルベルグ男爵夫人	1806～ 1810	1806年婚約（誤報） ブルンスヴィック伯爵の長女 『不滅の恋人』候補 生涯独身で幼児教育に捧げた.	ピアノソナタ第24番 「テレーゼ 」
ジョセフィーヌ・フォン・ブルンスヴィック → ダイム伯爵夫人 → 再婚	1804～ 1807	テレーゼの妹. ベートーヴェン私生児出産の謎. 『不滅の恋人』候補.	「月光」を最初に弾いた。 「熱情ソナタ」作曲の想い
テレーゼ・マルファッティ → ハンガリーのヨーハン・ドロシュディク男爵夫人 ドロテア・エルトマン男爵夫人	1809	当時19歳、求婚・・拒否される. イタリアの商人ヤーコプ・フォン・マルファッティ家令嬢。 当時のヴィルトゥオーゾ・ピアニスト。ベートーヴェンの作品を頻繁に演奏。チェルニーが絶賛。	「エリーゼのために」 テレーゼ ⇒ 乱筆のためエリーゼと誤読された. 作品101 第28番
アンナ・マリー・エルデーディ 伯爵夫人	1804～ 1815～	スポンサー。一時同棲。 告白の聴き手「懺悔聴聞僧」	チェロ・ソナタ第4番・第5番 ピアノ三重奏曲第5番・第6番
アントーニア・ブレンターノ 銀行家ブレンターノ夫人	1809～ 1827	スポンサー. 夫妻ともに「恩義ある友人」. 『不滅の恋人』最有力候補.	1817年の名作『遥かな恋人に』は彼女への想い。 1822年最後のピアノソナタ第32番（op.111）. 1823年ディアベルリ変奏曲
ベッティーナ・ブレンターノ	1809～	独立心旺盛な才媛.アントーニアの姪. ベートーヴェンの賛美者.ゲーテとの仲立ち.女性解放運動の先駆者で著名、ドイツ・マルク紙幣に載る.	
マキシミリアーネ・ブレンターノ	1809～	弟子.アントーニアの長女.	ピアノソナタ作品109（第30番）

参考： 青木やよひ著「ベートーヴェン《不滅の恋人》の謎を解く」

【不滅の恋】　参考：青木やよひ著「ベートーヴェン《不滅の恋人》の謎を解く」

ルードヴィッヒは１８２７年、５６歳で逝去(せいきょ)した。１８２４年に『第九』のコンサートを自費で開催して大成功を修め、燃え尽きてからである。逝去直後、財産管理人シンドラーが彼の書斎の隠し引出しから、『不滅の恋人へ』という宛名の手紙（鉛筆書き）を発見した。しかし、相手が誰なのか、日付も宛先・住所も一切書かれていない。

S.v.カロルスフェルトによる鉛筆画
1810年頃；40歳のベートーヴェン
（テレーゼ・マルファッティに求婚）
http://www.ri.kunitachi.ac.jp/lvb/por/por08.html

これがルードヴィッヒへの『不滅の謎』として、ロマン・ロランを始め、数十人の文学者や音楽史研究家たちに調査研究を強いて、誘(いざな)ってきたのである。いまだに、真実は想像という闇の中に埋もれたまま。唯一の歴史の証人である１８６１年まで生きたテレーゼ・ブルンスウィクにインタヴューできた研究者もいたが、ルードヴィッヒ芸術への称賛だけしか聞き出せなかったという。

この手紙は１８１２年（４１歳）頃に書かれたという時期まではつきとめられたが、『不滅の恋人』へは届けられたのか、なかったのか謎の一つである。やむなき事情があったらしい。思い詰めた心情を訴えている恋文、数々の推理と仮説が出ては消えていった。どうして死ぬまで隠し持っていたのか。

それは、誰にも見せたくない本心だったのか。それに加えて、相手を傷つける惧れが十分にあった。いわば禁断の恋であったのか。ただ、隠して残したのは、死後なら見つけられて公表され、届けられなかった本人だけには伝わるだろうと思ったのか。解らない。青木やよい女史によれば、諸々の状況証拠を収集して克明に分析した結果、アントーニア・ブレンターノが最有力であることは間違いないと結論している。

（映画「不滅の恋」では、とんでもない結末になっているが。）

この手紙は、「ハイリゲンシュタットの遺書」を凌(しの)いで、ルードヴィッヒを謎宮の芸術家としても有名にしてしまった。おかげで、数人の女性たちまでその謎宮入りして数々の小説や映画に登場し、歴史に名を馳(は)せたともいえる。

謎解きよりも、数多(あまた)の恋人たちを彷彿(ほうふつ)とする歌曲(リート)に興味が湧いてくる。

連作歌曲集「遥かな恋人に」 詩：アロイス・ヤイテレス （1816年）

https://www.youtube.com/watch?v=xOWC3pS8vrM
作詞者のアロイス・ヤイテレスは医学生であり、ベートーヴェンがヤイテレスの戦争負傷者に対する慈善活動を支援したことへの答礼としてこの詩を受け取った。
この曲をシューマンが大変好んだことが知られており、自身の《幻想曲ハ長調》や、《弦楽四重奏曲第2番》にこの曲のテーマを引用している。
<https://ja.wikipedia.org/wiki/>

これは、なかなかの抒情に包まれている。シューベルトのフェイクではないかと思ってしまうが、時はシューベルト１８歳であり得ないし、逆に、シューベルトが習ったというべき

であろう。

熟年の４５歳のときの作品であるから、もうとどかないアントーニアへの想いがあったのかもしれないとベートーヴェン研究家は言っている。誰しも、ルードヴィッヒの白鳥の歌*ではないかと思いたくなるほど、枯れた哀愁の風景もみえる。

＊「白鳥の歌」というのは、ヨーロッパでは「いまわの際（きわ）の言葉」という意味で使われるものなのである。白鳥はアヒルとは違って滅多に啼き声を立てない。ただ生命の火が燃え尽きる直前にだけ、哀切な、美しい啼き声を長々と奏でる。< http://www005.upp.so-net.ne.jp/micin/ese/ese21.htm >

アントーニアへの燃え盛る４１歳の恋心は、『恋人に』Wo0.140に歌われており、実際１８１２年頃、彼女に初稿譜が届けられている。実は、再婚して間もなく離婚争議の状態にあったジョセフィーヌの第７子懐妊と、夫君とよりを戻したアントーニアの第６子懐妊は同時期（１８１２年）に起きている。この背反する予期せぬ出来事が、アントーニアとの別離の大きな要因になったのではないか、と、青木やよい女史は推理した。すなわち、忸怩（じくじ）たる後ろめたさがルードヴィッヒの積極性を弱め、人妻である立場の彼女は疾（やま）しさの解消を願ったのである。『不滅の恋人へ』の手紙は、何と、ジョセフィーヌ懐妊についてテレーゼから知らされる前に書かれて届けられた。正に運命のいたずらともいえるかもしれない。果たしてお互いのやむなき事情を理解し合った結果、ルードヴィッヒに戻されたと解されている。このため、状況に関するあらゆる情報が省かれたので、鉛筆書きの「謎だらけのラブ・レター」になったのであろう。

「ディアベルリ変奏曲」を１８２３年にアントーニアに献呈した史実から、何と１８１２年の破局から１０年以上もブレンターノ夫妻とのきれいなパトロン関係は続いていたのである。

ここで掲げておくべきつつましい出来事がある。１８１１年頃、心身症のアントーニアを見舞ったとき、無言で訪れ、眼で挨拶してピアノを２時間ほど弾いて彼女を慰め、終わると静かに無言で去っていった。ルードヴィッヒのいたわりの優しさは計り知れないとアントーニア自身が語っていたという。同じことが、なんとジョセフィーヌを見舞ったときにも起きている。彼は己れができるこの世で最高の見舞いを最愛のひとに自ら届けたのだ。このことを我々は忘却できない。もう、傍若無人（ぼうじゃくぶじん）なドンファンなどと批判することはできない。

しかし不思議である。我々は、偉人の知人、友人、保護者、恋人などとの支離滅裂（しりめつれつ）な関係は、当たり前だとの観念に陥（おちい）ってしまう。わが国では親鸞が有名すぎる。でも、ルードヴィッヒの人見知りしない性向は、失恋も聾疾（ろうしつ）も彼の天才を破壊させることはできなかった。だから、愛すべき人々に楽興を提供したくてしょうがなかった。だから、彼の人見知りしない性格は、彼の音楽にも内在して無差別に全世界の人類まで波及したのであろう。

【傑作の森】

稚拙(ちせつ)ながら、我々クラシック・フリークが既成観念を振り払って彼の精神状態を覗(うかが)ってみよう。３０代の盛りにおいては猛烈な失恋台風に何度も煽(あお)られながら、加えて悪魔のような聾疾(ろうしつ)に執拗に悩ませられた。なのになぜ、傑作だらけの創作活動が可能となったのか。

「荘厳ミサ」作曲中の
ルードヴィッヒ（52歳）

次に掲げるおびただしい名曲群は、音楽史上、どれ一つとってもきらびやかな１００カラット以上のダイヤモンドなのであるが。現在の価値に照らせば、今の著作権法によるロイヤリティ収入に無理矢理に換算すれば、数億円の年収になる。それが逆に贅沢プラス怠慢という毒素が全身を蝕(むしば)んでしまう。それ以後の創作という蕾(つぼみ)の開花は叶(かな)わず根元から枯れてしまうはず。だから、億円以上の年収があったとしたら次のような傑作の森、直径２m以上のレバノン杉の豊かな森は繁茂(はんも)しなかったであろう。

＜年（歳）＞	＜歴史的な名作＞	＜出来事＞
1801年：(30歳)	ヴァイオリンソナタ第5番　ヘ長調『春』	
	ピアノソナタ第14番嬰　ハ短調『月光』	ジュリエッタに求婚・・・破談
	ピアノソナタ15番　ニ長調『田園』	
1802年：(31歳)	ピアノソナタ第17番　ニ短調『テンペスト』	
	交響曲第2番　ニ長調	ハイリゲンシュタットの遺書
	ヴァイオリンソナタ第7番　ハ短調	
1803年：(32歳)	ピアノ協奏曲第3番　ハ短調	
	ヴァイオリンソナタ第9番　イ長調『クロイツェル』	
1804年：(33歳)	ピアノソナタ第21番　ハ長調『ワルトシュタイン』	ジョセフィーヌに求愛したが、
	交響曲第3番　変ホ長調『英雄』	彼女はダイム伯爵に嫁ぐ。
	ピアノソナタ第23番　ヘ短調『熱情』	（ナポレオン登場）
1805年：(34歳)	ピアノ協奏曲第4番　ト長調	
	ピアノ、ヴァイオリンとチェロのための三重協奏曲　ハ長調	
1806年：(35歳)	交響曲第4番　変ロ長調	
	弦楽四重奏曲第7番　ヘ長調『ラズモフスキー第1番』	
	弦楽四重奏曲第8番　ホ短調『ラズモフスキー第2番』	
	弦楽四重奏曲第9番　ハ長調『ラズモフスキー第3番』	
	ヴァイオリン協奏曲　ニ長調	
1807年：(36歳)	交響曲第5番　ハ短調『運命』	
	ミサ曲　ハ長調	
1808年：(37歳)	交響曲第6番　ヘ長調『田園』	
	『合唱幻想曲』	
	ピアノ三重奏曲第5番　ニ長調、第6番　変ホ長調	
1809年：(38歳)	ピアノ協奏曲第5番　変ホ長調『皇帝』	テレーゼ・マルファッティに求婚
	ピアノソナタ第24番　嬰ヘ長調『テレーゼ』	

	弦楽四重奏曲第10番　変ホ長調『ハープ』	
1810年：(39歳)	ピアノソナタ第26番　変ホ長調『告別』	アントーニアと知りあう.
	弦楽四重奏曲第11番　ヘ短調『セリオーソ』	
	悲劇『エグモント』への音楽（序曲と9曲）Op.84	

一般的には、失意のどん底に落ち込めば、創作意欲など沸(わ)くどころか消滅してしまう。

ルードヴィッヒは、聾(デフ)に加えて失恋という負のエネルギーを作曲という熱エネルギーに即座に変換できる能力を有していたとしか思えない。これらの名曲は失恋しなければ産まれなかったともいえる。凡人には逆立ちしても信じられない。現代人は、彼は生来のプレイボーイであったのではないか、失恋ウィルスに対抗できるワクチンを彼は持っていたのだろうとか、揶揄(やゆ)するかもしれないが。我々は結局、ロマン・ロランが言った「傑作の森」という総括表現に肯(うなず)くだけなのか。

いずれにせよ、1807年から1808年にかけて、『交響曲第５番運命』、『交響曲第６番田園』という画期的な名作が、この短い期間に作られた。そして、これらを締めくくるように、1808年12月22日、アン・デア・ウィーン劇場において、ルードヴィッヒの指揮により、この2曲の演奏会が開かれ、歴史上きわめて重要な出来事となったが。後の『第九』に比べると余り成功したとはいえないが。

忌まわし運命さえもルードヴィッヒは、音楽にしてしまった。1807年夏、ルードヴィッヒの胸の奥深くで、「ダダダ・ダーン、ダダダ・ダーン。」という一連の音が鳴っていた。後に「運命が戸を叩く音」として有名になる交響曲の主題が、もう４年もの間、心の中で鳴っていた。1798年、ルードヴィッヒが28歳の時、最初の耳の不安を感じた年である。自分自身が運命を切り開いていこうとする破壊の音、それを表したと言われてきた。

1808年に完成された交響曲第６番『田園』は、表題音楽の優れたものであるが、それよりも自然の神々への感謝に満ちていることは、**運命を呪わなかった証**となろう。

いったい、どのようにして地獄の苦悩から自らを救出したのか、本当にワクチンを備えていたのか、誰も書いていない。ロマン・ロランさえ、ただ強大な精神力の持ち主であったと結論付けているだけである。それを是とすると、彼の芸術を百花繚乱の如く咲かせた夢の塊(かたま)りとの関係が曖昧(あいまい)となる。一般的には拷問のような肉体的苦痛は鍛(きた)えられた胆力により耐えられるとされる。誰からも特段に求められていない創作に向けることはありえない。なにもそこまですることはない。

果たしてどんな心中の戦いに勝利して、人類の至宝ともいえる楽曲群の創作に邁進(まいしん)できたのだろうか。

【特効薬】

一つの答えがあった。ルードヴィッヒがジュリエッタに求婚（1801年11月）して破談となった最中に、「ハイリゲンシュタットの遺書」を書く前に（1802年10月）、絶望の真っ只中で

ピアノソナタ第17番 ニ短調『テンペスト』 Op.31-2（1802年初頭）
第1楽章 ニ短調 Largo（悠々と）～Allegro（速く）

https://www.youtube.com/watch?v=rwwtQaM7OKo

が創られた。すでに私の「クラシック巡礼」冒頭で、第３楽章に焦点を当てて書いてきたが、当時は心魂の戦いという問題にはとどいていなかった。

その後、ロマン・ロラン作「エロイカ（英雄）からアパッショナータ（熱情）」における分析からヒントが得られた。それは、第１楽章にあった。ロマン・ロランが「崇高な命令に対する魂の愁訴」と絶賛して百言を費やした解説のとおり、その二つのイデー（想念）：強気と弱気の会話は聴きものであり、確かに運命という帝王の絶対命令に弱々しく嘆きながらこたえる様子は鮮烈である。

あたかも心中で真剣勝負しているシーンが、レシタティーヴォ（語り調）のように聴こえる。帝王と一下士官の対話とでもいうか。帝王が怒鳴り飛ばして下士官は平伏してどうしようもないと嘆いている。一例であるが、それぞれに場を変えてみて想像すると納得がいくのではないか。

【帝王の喝】崇高な命令		【下士官の嘆き】魂の愁訴
「絶対に勝つんだ、何がなんでも」	→	「勘弁してください、もう心が滅茶苦茶なんです」
「女にのぼせるからだ！」	→	「だって、ぞっこん惚れてしまったんです」
「あきらめろ！	→	「無理です。彼女も夢なんですから。
もともとの夢は忘れたのか？		人々に歓喜を贈る夢は忘れてません。
遺書は嘘だったな！		あれは真実です。ご理解ください。
それなら、あとはやるだけだ！		ですから、帝王の神力で私の魂を助けてください。
おれをあてにするな！」		そうは言っても、お願いです、後生です。・・・・・」

このような「掛合い」の現場が浮かんでくる。これが、ルードヴィッヒをして第三の魂にいざない、魂の治療の特効薬になったのではないか。すなわち、辛辣な嘆願の場を創作して、第三の魂に裁いてもらったのであろう。誰しも、日記をつけたり手紙を書いたり、回顧録を書くと自然に吹っ切れた経験があるはず。**書いたものが第三の魂となる。**そのワクチン効果を利用したルードヴィッヒ、傑作を書けば書くほど傷だらけの心魂が癒えてしまう。

凄い奴だ。

ロマン・ロランの言葉を拾ってみると、第１７番では次のような短評が掲げられている。

第１楽章“アレグロ”　「崇高な命令に対する魂の愁訴」

第２楽章“アダージョ”　「その楽園的な平和、その大気のような軽快な遥動」

第３楽章“ロンド”　「真夏の夜の夢の狂想曲」

さらに、次のように例(たと)えた。

「 この曲の“アレグロ”が正面玄関であり本陣の中央広間であるならば―

またその“アダージョ”が後陣の奥の間、あるいは中心を覆(おお)う円屋根(ドーム)であるならば―

この終章の“ロンド”はその上に置かれた尖塔(せんとう)である。」

ロマン・ロランは、ルードヴィッヒについて楽曲構成の建築家という側面を重視していたから、このような表現になった。

では、**楽曲構造の建築家**というルードヴィッヒの作曲技術を俯瞰してみよう。

その中心は、次のような強力なソナタ形式　にあり、その普遍性は永遠である。

一つの楽章 （ソナタ形式）				
［第一部］		［第二部］	［第三部］	
序奏	提示部	展開部	再現部	コーダ
	第1主題、第2主題		第1主題、第2主題	

ロマン・ロランの観察を引用すると。

交響曲第3番「エロイカ」第1楽章において:

・・・・・・ 構成の多様な要素と“**展開部**”の力強い圧力とを支配する数の諸関係を発見して、驚きに打たれたのである。ローレンツは次の4大区分を発見している。

Ⅰ. 54小節　Ⅱ. 64小節　Ⅲ. 54小節　Ⅳ. 60小節

第1区分と第2区分とは、互いに対称的対立、つまりテーゼとアンチテーゼとの関係を形づくり、第3区分と第4区分は、綜合の作用を行っている。

そして、全体はこの交響曲の中心にあって、それ自身一つの完全なソナタ、完成された交響曲となっているのである。

更に、一言付け加えるならば、指定にしたがってアレグロの第一部を二度演奏してみると、

全三部の数は、次のような驚くべき均衡を与えている。

反復付きの第一部	294 小節
第二部（展開部）	250 小節
コーダ付きの第三部	294 小節

ベートーヴェンの天才が、この比率に関して**物差しを当てて計り出すような振舞い**を全然していないことは明らか。 正に、我々に讃嘆の念を喚起する。

【激情】

悩み悶(もだ)え続けたルードヴィッヒの勝利宣言の最たるものは、

ピアノソナタ第23番 ヘ短調「アパッショナータ(熱情)」(1805年:34歳)

第3楽章 Allegro ma non troppo – Presto

(前半:余りはなはだしくなく早く ／ 後半:急速に)

http://pianodouga.blog76.fc2.com/blog-entry-288.html

であることは疑いない。特に第３楽章である。すべての彼の楽曲の最終章で、これほど満身創痍(そういで)で血潮が 迸(ほとばし)る凱歌(がいか)は、見当たらない。

ロマン・ロランの「ベートーヴェンの生涯」を読んだとき、ドイツ帝国の鉄血宰相ビスマルクの感嘆について、次のようなくだりに目が貼り付き愕然とした。

『アパッショナータ・ソナタ』については、ビスマルクがこう言っていた

——「これを私がたびたび聴けたら、私は常に甚だ勇敢であろうが」　と。

ローバート・フォン・コイデルはアパッショナータを、・・・　ヴェルサイユで弾いてビスマルクに聴かせた。

この作品の最後の部分についてビスマルクは言った

——「これは人間の全生活の奮闘と嗚咽(おえつ)だ。」　・・・

そして一度ならず確言した

——「私の神経にはベートーヴェンが一番ぴったりする」　と。

この曲は、テレーゼの弟、ジョセフィーヌの兄であるフランツに捧げられたと伝えられているが、実は、ジョセフィーヌへの想いが反映されているのではないかという意外な話もある。「不滅の恋人」を探しあぐねた研究家の突拍子もない憶測ではある。聴いてみれば、そんなロマンを醸(かも)す箇所は微塵(みじん)もない。

蓋(けだ)し、すさまじい闘魂の凱歌である。

乾坤一擲(けんこんいってき)で桶狭間(おけはざま)を制した信長の歓喜である。

真っ暗闇の無音地獄から這(は)い上がったヘレン・ケラーの激情でもある。

(ＮＨＫ制作「映像の世紀」で、人と話すのに相手の頬に掌を当てて口の振動を解している彼女を見たら、滂沱(ぼうだ)として涙が止まらなかった。よくぞ無音の暗闇からそこまで脱け出したものと、よくぞ発狂寸前でも血眼(ちまなこ)の奮闘をしたものと。)

【天使】

運命の疫病神に翻弄されても、恋い焦がれた女性にふられても、身分の低さを呪っても、彼は「夢」を忘れなかった。そんな怒りの激情がほとばしるアパッショナータを創りながら、いつも夢のような天使の音楽を忘れなかった。それは、人間臭さのない情感であり、飛天（天女）のハミングのような旋律である。

ピアノソナタ第８番 ハ短調『悲愴』（1798年：27歳）

第２楽章　アダージョ・カンタービレ（緩やかに・唄うように）

https://www.youtube.com/watch?v=6WzY8PQCe34

この曲は、初めて聴いたときから、うららかな春の真昼に、小学２年生のときのW先生とクラスのみんなが遊んだティンカーベル達が舞うあのレンゲ畑の匂いに包まれる。また、子供の時に肌寒い晩秋の項、日だまりの縁側で寝転がりながら、例えようもない心地に浸ったことが鮮やかに思い出される。できれば、母が日向干しのために縁側に敷いた布団のうえで。いつのまにか猫まで寄り添ってくるのだが、傍で寝るとあいつは「ゴロゴロ」と寝息が少々うるさいので興を冷ますが、奴も知っている。最高のうたた寝がそこにあると。同時に、奴も一抹の不安がある。レンゲ畑でもあったように、そのうち見つかって母に怒鳴られるかもしれないと。

アパッショナータの激情と、この“アダージョ・カンタービレ”の安らぎの対比ほど、ルードヴィッヒの心魂の極端さが際立つものはない。かれの心の半径は、やはり宇宙規模とも想えてしまう。どれもこれも同じようなアマデウスの調べに辟易とする人々が少なくないのも肯ける。

そして、この曲には米国のビリー・ジョエルなど数多のポップス歌手が詩を付けて唄っている。知らぬ間に『第九』以上に本曲が浸透していたのである。構えずに聴けるのだから頭が下がる。

それらの中で、イギリスのジョセフ・マクマナーズという少年が歌う

「天使の音楽」“Music of the Angels”

https://www.youtube.com/watch?v=LEosNoP_Meg　（無料）

が白眉となろう。あの世のルードヴィッヒが感極まっている。

この名曲には、いろいろなポップス系のミュージシャンにより数々の歌詞が付けられた。ゲーテが考えていなかった、**音楽が文学（詩）**を引き連れたのである。小品「エリーゼのために」も、昭和３０年代にザ・ピーナッツが「情熱の花」として日本語歌詞をつけたものを唄っていたことは、応用が世俗的でも、我々の記憶に残っている。実は、私も音楽に導かれて書いてきたことは、読者も気付いているだろう。

彼は七転八倒(しちてんばっとう)しながらも「夢」をつくり続け、没後およそ２００年経っても不死鳥(フェニックス)のごとく全人類に希望を与え続けてきている。ルードヴィッヒは美男でもないのに、難聴ゆえに甘い恋の囁(ささや)きもできないのに、心には世界中の誰もが持っている「天使の夢」が活き活きと住んでいた。

彼は、ただ、それを心から現わすことが出来ただけである。美しい調(しら)べとなって。

名作『ジャン・クリストフ』にて、ロマン・ロランが「音楽は魂の呵責(かしゃく)なき鏡である」と言っている。然(しか)り、ルードヴィッヒの魂はいつも曇りなき鏡（曲）に映っていたのである。だから、演奏家や指揮者に限らず我々聴衆もまのあたりに感動して、その反射鏡をいつのまにか備えてしまって更なる人々に照らし返して、その歓喜にひたってきている。

『感動』とは感激とはちがう。感極(かんきわ)まって行動すること、勇(いさ)んで何かをすることが感動であり、感激は単なる享楽でしかない。享楽に耽(ふけ)ればそのうち飽きる。ルードヴィッヒの魂、すなわち「夢」達の一つでもいいから直(じか)に触(ふ)れてみれば、その喩(たと)えようもない優しさに包まれて、人々へ貢献することにためらうことなく行動してしまうにちがいない。

そのためには、先ず、己れの審美眼を育(はぐく)む必要があろう。

ＦＩＮ

別当　勉

〈betobetoven@mail2.accsnet.ne.jp〉

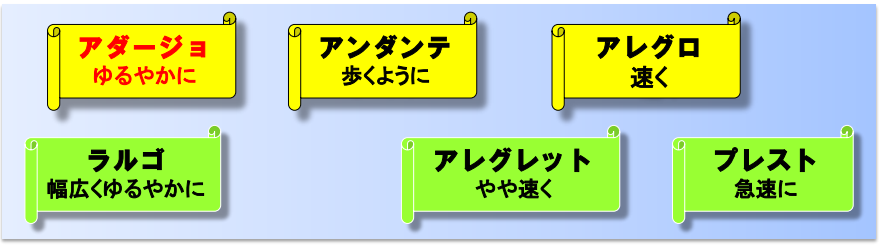
チュートリアル（教習）

クラシックを聴く上でも参考になる“テンポ”について、紹介する。その代表としてピアノソナタ第８番第２楽章の表示“**アダージョ・カンタービレ**”に注目する。彼が、頻(しき)りに使っているテンポ指示である。

唄うように「カンタービレ」（1）

ところで、“アダージョ・カンタービレ”って何だろう。

先ず、“**アダージョ**”だが、これは譜面にて曲の速度を表わす表記用語の一つであり、調べたらいろいろある。代表的なものは次のとおり。



いずれもイタリア語である。だから、パセティーク第2楽章は「ゆるやかに」という意味の指定なのである。ちなみに、ベートーヴェンは、このような感覚的なもの（アナログ）でなく、当時発明されたメトロノーム（ディジタル）に目を見張り、この方ががいいと思ったそうだが。やはり一般に浸透してしまったもの、つまりデファクトには、革新オタクの彼でも捲かれるしかなかった。

5

唄うように「カンタービレ」（2）

次に、“**カンタービレ**”は「うたうように（修飾）」という意味であるから、TVドラマ「のだめカンタービレ」は、野田恵が唄うような感じのはずなのだが、何故か「ふざけ（スケルツォ）」が多いのもクラシックの側面を突いて面白い。

第2楽章におけるベートーヴェンの指定は、「ゆるやかに唄うように」であるが、もっと紐解けば、元来、次のように演奏することが求められている。

第2楽章は、“リート（歌）”と呼ばれる形式の、穏やかでメロディックな楽章 （ロマン・ロラン）

そこで、むかしビリー・ジョエルがこの曲に詩を付けて歌っていたことを思い出して、ネット検索したら、可憐な男の子が歌ったアルバムに足止めをくらった。これこそ夢見るようなさわやかな「カンタービレ」、胸がふるえた。この天使の歌声は、ジョセフ・マクマナーズという少年だが、ベートーヴェン自らが指定したとしか思えないほど、ズバリと的中している。

誰でも、ベートーヴェンの幅の広さに、脱帽するはずだ。

試聴：Music of the Angel

6

次に、“ソナタ”で、何度も曲名に使われているものだが、余り追求されてないのが現実である。実は、ここにルードヴィッヒの類い稀な分析力がメスを入れ、後世のプロたちがこぞって習った分野なのである。まさに「革新」であった。

ソナタとは（１）

ピアノ・ソナタなどにおけるソナタとは、バッハ以前から「教会ソナタ」、「トリオ・ソナタ」などのように使われてきた伝統的な曲の形態である。
一応、次のように解説されている。

ソナタとは、イタリア語:で“sonata”（演奏されるもの）という意味である。
さらに、クラシック音楽における器楽曲または室内楽曲のひとつであり、
多くは、複数楽章から成る。　＜http://ja.wikipedia.org/wiki/＞

ベートーヴェンよりも少し前の、モーツァルト、ハイドンの楽曲の標準的な構成は、以下のような形態であった。

＜ハイドン、モーツァルトの作品群における構成＞

第１楽章：　綜合（ソナタ形式）
第２楽章：　リート（アダージョ）
第３楽章：　メヌエット（踊り）
第４楽章：　フィナーレ（ロンド形式）

1

ソナタとは（２）

ベートーヴェンのソナタなど

第１楽章：　綜合（ソナタ形式）
第２楽章：　アダージョ
第３楽章：　フィナーレ（ロンド形式）

ベートーヴェンの交響曲など

第１楽章：　綜合（ソナタ形式）
第２楽章：　アダージョ
第３楽章：　スケルツォ
第４楽章：　フィナーレ（ソナタ形式）

もともと革新派ベートーヴェンの作品群では、典型的な楽章構成は上に掲げるように、彼はバージョン・アップさせた。これらは、以後の巨人たち、シューベルト、ショパン、リスト、シューマン、ブラームス、チャイコフスキー、ブルックナー、マーラーというそうそうたる作曲家に、すべて引き継がれていった。 だから、音楽界全体で「楽聖」とも言われるのだ。しかもローマ建築に劣らぬ楽曲の構造について独自に練り上げたように、彼の恐るべき才能の一つである緻密さは、想像を絶する。（詳細は後述）
特に、交響曲においては、第３楽章メヌエットの変わりに、踊るような「スケルツォ：冗談」を導入して、曲の自由度を拡げた。
例えば、初期のピアノソナタ第２番第３楽章〔アレグロ・スケルツォ〕は、ピエロのふざけたダンスみたいなので、そのおかしげな色合いを聴いてみよう。

試聴：　ピアノ・ソナタ第２番第３楽章

9

ソナタとソナタ形式は異なる。前者は曲の形態であり、後者は曲の内部構造である。

それではソナタ形式（1）

最も壮麗な**ソナタ形式**の曲構成は、次のとおり3部構成となっている。

一つの楽章				
［第一部］		［第二部］	［第三部］	
序奏	**提示部**	**展開部**	**再現部**	**コーダ**
	第1主題、第2主題		第1主題、第2主題	

それらは、最初の「序奏」と最後の「コーダ（終結）」でサンドイッチされており、コーダは締めくくりとしてダイナミックに仕上げられることが多い。序奏で聴き手を驚かすのは、運命交響曲、皇帝協奏曲が余りにも有名である。

ソナタ、交響曲においては第1楽章に多用されているが、だいたい、曲に品位ある豪華さを与える手法としては、ソナタ形式以外には見当たらない。

なお、よく「動機（モチーフ）」といわれるものは、第1主題であり、これが作曲の素になる、つまり、作曲家の創作における出発点となる。

参考までに、ベートーヴェンのソナタ形式の応用の緻密さについて、ロマン・ロランの分析例の一部を次頁に掲げる。

11

それではソナタ形式（2）

ロマン・ロラン『エロイカからアパッショナータまで』より
交響曲第3番「エロイカ」第1楽章のソナタ形式にかかる分析の1例・・・・・

・・・・・・ 構成の多様な要素と“展開部”の力強い圧力とを支配する数の諸関係を発見して、驚きに打たれたのである。ローレンツは次の4大区分を発見している。

Ⅰ．54小節　Ⅱ．64小節　Ⅲ．54小節　Ⅳ．60小節

第1区分と第2区分とは、互いに対称的対立、つまり提立（テーゼ）と反提立（アンチテーゼ）との関係を形づくり、第3区分と第4区分は、綜合の作用を行っている。そして、全体はこの交響曲の中心にあって、それ自身一つの完全なソナタ、完成された交響曲となっているのである。

更に、一言付け加えるならば、指定にしたがってアレグロの第一部を二度演奏してみると、三部――反復付きの第一部、展開部、およびコーダの大詰めをもつ最後の第三部――の数は、次のような驚くべき均衡を与えている。

294―250―294

ベートーヴェンの天才が、この比率を物差しを当てて計り出すような振舞いを全然していないことは明らかである。彼の本能が、闇夜にそれを打ち立てたのだ。そして、そのことこそ正に我々の讃嘆の念を喚び起こすものなのである。

12

ソナタ形式以外の形式には、次のようなものが掲げられる。

それではソナタ形式（３）

ロンド形式は、ピアノ・ソナタ、ヴァイオリン・ソナタなどの終楽章で適用されるのが一般的であるようだ。決して筆頭の第１楽章では使われない。

主部			中間部	主部		
A	B	A	C, D, …	A	B	A

ロンド形式の曲構成〔A, B, C, D, ‥‥‥ は、主題旋律、以下同様。〕

三部形式は、ロンド形式の縮小版ともいえ、ベートーヴェンのソナタでは、第２楽章で使用されている例がいくつかある。

A	B	A (A')

二部形式は、よく音楽の教科書に載っている唱歌にみられる。最も基本的な曲構成であり、ポップスでも定番になっている。

A		B	
a	a'	b	a' (a''／b')

参照： < http://ja.wikipedia.org/wiki/>

それではソナタ形式（４）

これらの他には、バッハ神技の白眉『シャコンヌ』のような変奏曲形式、また、おびただしい数の作品を残した『フーガ』もある。ベートーヴェンのエロイカ交響曲では、第２楽章にフーガが、第４楽章に変奏曲形式が使われており、その応用の見事さには、天上のバッハも舌を巻いているにちがいない。

ベートーヴェンの「パセティーク」は、最も典型的な美しいソナタであり、その構成は次のとおり。

第１楽章：	第２楽章：	第３楽章：
ソナタ形式	拡張三部形式	ロンド形式

第１楽章は「悲愴」という題名のとおりの曲調である。出版時にベートーヴェン自身により「悲愴的大ソナタ」というタイトルが付けられた。

第３楽章は、最も綺麗なロンドと言われており、曲自体も、形に意識をとらわれずに、美しく軽やかな「アレグロ・ロンド」が楽しめる。

試聴： ピアノ・ソナタ第８番「パセティーク」第３楽章

14

以上、「クラシカンタービレ（つくば中央図書館文化支援活動での演目）：２０１３年１０月」より

＜参考図書＞

No.	題名	著者	発行元
1	ベートーヴェンの生涯	ロマン・ロラン（片山敏彦訳）	岩波書店
2	ベートーヴェン 「エロイカからアパッショナータまで」	ロマン・ロラン（佐々木斐夫訳）	みすず書房：1968
3	ベートーヴェンの恋人たち （ロマン・ロラン全集第70巻）	ロマン・ロラン（蛯原徳夫訳）	みすず書房：1952
4	ジャン・クリストフ	ロマン・ロラン（豊島与志雄訳）	岩波書店
5	ベートーヴェン ＜不滅の恋人＞の謎を解く	青木やよい	講談社現代新書
6	ベートーヴェン 第九交響曲とドイツ音楽の精神	リヒャルト・ワーグナー （蘆谷瑞世訳）	北宋社
7	オーディオ巡礼	五味康祐	㈱ステレオサウンド
8	音楽巡礼	五味康祐	新潮文庫：1981